
銀王と…

Liar

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀王と…

【ΖΖコード】

Ζ5Ζ40T

【作者名】

Liar

【あらすじ】

私は母と妹を守るために力を得て王となつた。そしてある日一人の少女を拾つた。少女の瞳はまるで…。

コードギアス LOST COLORSと魔法先生ネギま！のクロスオーバーです。ライ王過去編 麻帆良学園

銀王と吸血鬼1（前書き）

「指摘がありましたので、長編に投稿しなおしました。」

銀王と吸血鬼1

Side・エヴァンジェリン

はあ……

またか……

と独り荒野を歩く私はため息をついた。

私の目の前にはローブを来た数人の男が現れ、彼らは私を睨み付けて息巻いていた。

「見つけたぞ！貴様が闇の福音、エヴァンジェリン・A・K・マグダウェルだな！？」

「貴様の首はいただく！」

「貴様の存在は危険だ！」

「全では正義のためだ！！」

ちつ、めんどくさい……

吸血鬼になつて200年経つ、名前が知れ渡るようになると次から次へといひこうのが沸いてきた……

今も街から街を転々と歩いていた最中だ。

私が何をしたと言つんだ？

私は怯むことなく彼らを睨み付け

「また賞金稼ぎか……。それとも正義面した魔法使いか……。ふん、どうでもいい……そちらがその気なら私も相手をしてやるわ」

と彼らに冷たく言い放つ。

「はつ……つまで余裕でいられるかな！？」

「死ねええええつ！」

私の言葉に激昂した男達は次々と私に襲いかかる。

反撃しようと呪文を唱えようとした瞬間

「貴様等、そこで何をしている?」

よく通る男の声が響いた。

そこには白馬に乗った10代半ば前ほどの、銀髪で、深い海のよつなるあるいは空のよつな蒼い瞳をもつた眉田秀麗な男がそこにいた。

まさに美しいとこつ形容がぴったりな男だった。

Side・ライ

最近、周りの国で怪しい動きがあるため視察をかねて数人の騎士を連れて遠征に来ていた。

地を知つていると云ふことはそれで戦が有利になることもある。

自ら指揮をするためにも出来るだけ把握をしておきたいのだ。

その視察を終え、国へ帰る道中不愉快なものを見つけた。

それは数人の男達が、10歳ほどの少女に今にも襲いかかろうとしているところだった。

それを見た私は騎士達の制止の声を無視し駆け出した。

「貴様等、そこで何をしている?」

男達は私の声に驚き、動きを止めて私を見る。

「な、なんだよお前は!?」

「邪魔をするな!」

彼らがこちらに叫んでいる内に、騎士達もこちらにやって來た。

「陛下!!--一人で飛び出して行かないでください!!--」

「何のために私たちがついていると思つてているのですか!?」

と叫ぶ騎士達にすまないと謝りつつ、少女を襲おうとしていた男達に尋ねた。

「もう一度聞く。貴様等、何をしていた?」

彼らは、いつと喉を詰まらせ逃げ出せりとした。

このような不屈き者を逃がすわけにはいかない。

「お前達、こいつらを捕らえよ!」

私は騎士達に命令を出し、彼らが捕えられるのを見届けてじつといひの様子をうかがっていた少女に声をかけた。

Side . HVA

「大丈夫か?」

騎士に男達を捕らえさせ、銀髪の男は馬から降りると、私にそつ声をかけてきた。

先ほど陛下と呼ばれていたことからおやりく何処かの王で魔法関係者ではないと思われる。

男達もそれに気付いたのか、私を襲おうとしていた理由を言わず逃げ出そうとしたのだ。

魔法を使つわけにはいかない彼らは、騎士達に簡単に捕らえられていた。

そして200年ほど誰から心配されるような言葉をかけられなかつた私は、銀髪の男の投げかけた言葉にとつさに答えることができなかつた。

私が黙つて銀髪の男を見ていると彼は再び声をかけてくる。

「見たところ、怪我は無いようだな。しかし、お前のような子供がこんなところでなにをしている?」

「ふん、私が何をしようとも関係ないだろう?」

なつ貴様つ無礼だろ?ー口の聞き方を慎め!

と後ろの騎士が怒るが銀髪の男はそれを片手を上げて静めさせて答えた。

「そうだな……たしかに関係は無いが……

民を守る立場の者としては、いつも見つけてしまつた以上放つてはおけないだろ?」「

「ほう？ずいぶんとお優しい王様だな？」

まあ助けてくれたことに一応礼を言ひておくれ。」

そう私が答えると男はくつくつと笑い出して言つた。

「お前は面白にやつだな。気に入つた。

奴らに囲まれていたときもそつだつたが、物怖じと言つものしないらしい。

特にその眼が気に入った。

とにかく、私は王としてお前のような子供をこんな荒野を放つて行くわけにはいかない。

私の名はライラル・フォン・ブリタニアと言ひ。ライで良い。お前、名は何と言つ？

「……エヴァンジエル・A・K・マグダウル」

名乗らず去ろうとしたが、先に名乗られてしまつては答えないのは義に反するので嫌々ながら答えた。

まあ、一般人までには私の名は知られていないだろ。問題は無いはずだ。

「そうか…エヴァンジエル。一人でこのような荒野を歩いていた

のには何か事情があるのだ？……

「どうだ？私の城に来てみてないか？」

と言い、手を差しのべてきた。

ライの提案に私は息をのむ。

そんなことを言わるとは思わなかつた。

この手を取つてもいいのかわからぬ。

いや、取るべきではないのはわかつてゐる。

私は闇の福音、真祖の吸血鬼だ。

正体を知られればどうなるかなど明白だ。

この男の言葉など無視してまた旅を続けることだつてできる。

しかし、私は気が付くと男の手を取つてしまつていて。

何故手を取つてしまつたのか、自分でもわからない。

ライは私を見てふと微笑んだかと思つて、そのまま私を抱き抱えて

馬に乗り帰るぞと騎士達に告げ走り出した。

最初は抵抗したが、今は落ち着けとライが言つと、どうこうわけか落ち着いてしまった。

そうしてこいつの国へと帰る間、こいつに抱えられていて気が付いた。

そうか…私は…ぬくもりが欲しかったのだ…

今まで考えたこともなかつたが、

本当は寂しくて、淋しくてたまらなかつたのだ…

と。

200年ぶりに感じた人のぬくもりに、私は知らず知らずのうちにライの服をしわができるほどに掴んでいた。

Side · ライ

先ほどまで暴れていたが、今は落ち着くようギアスをかけておいた。

そして今、こうして私の胸に丸くなつて私の服をつかんでいる少女を抱えながら思った。

えらく威勢のいい子供だと思っていたが、本当は寂しかつたのだろう。

こうしてみると、やはりただの子供だったらしく。

この子供の眼を見たとき強い瞳だと思った。それと同時に何かを抱え込んでいるようにも思えた。

先の戦で親を亡くした子供なのだろうかとも思つたが、その辺りは国に帰つて聞くとしよう。

なぜこの娘を城で保護すると言つたか。

王だから民を放つておけないという理由で毎回孤児を城に連れ帰つていては、城が子供で溢れてしまう。

もちろん、孤児のための施設はあるのだ。

ではなぜわざわざ 城で と言つたか。

それは単純にこの子供が気に入ったからだ。

いや気に入ったといつのではない。気になつたのだ。

それだけではない、自分自身のためだ。

正直に言つと、初めて彼女の蒼い瞳を見たとき、背筋が凍りつくような感覚があった。

戦で感じじるような殺氣。いや、戦でもあるような感覚を味わつたことはない。

殺氣、諦観、悲しみ、怒り、そのような負の感情が流れ込んでくるような感覚。

どこかで見たことがあるような気がする。

そうだ、あれは私がまだ力を手に入れる前、母や妹とともに虐げられ、蔑まれていたとき、

いつか見た自分自身の瞳だった。

そうだ、私がこの娘を拾つたのは、きっと彼女に昔の自分を見たからだ。

なぜこの子供がそのような眼をするのか、純粹に気になった。

そしてこのよつたな眼を、せせておくれでなことも思つた。

私は母と妹を守るために、絶対遵守のギアスを手に入れたが、この子供に、私と同じ道を歩んでほしくはない。

この力を手に入れたことに後悔はないが、それでも、正しかつたとは毛頭も思つていない、

この力を手にすることなく、幸せになれるところとも知つておきたかつた。

知つておきたいといつのはおかしいか……

見てみたいのだと思ひ。

私は違つ方法で幸せになれるところといふことを……

この濁つた蒼い瞳を、いつか澄んだ瞳にしてやりたい。

この娘を心から笑わせることができれば、私も救われるよつた気がした。

母や妹とともに、この娘も守つてやう。きっとそれはこの娘のためなどではなく、私自身のためなのだ。

ふつと血潮の笑みを浮かべた。

我ながら最低だなと思いながら私の胸で丸くなつて顔を隠している少女を見やり

抱えていた腕を先ほどよりも強く抱きしめた。

side・エヴァンジェリン

ライの国に到着した。

国に入ると、ライは国民に歓迎されていた。

どうやら相当慕われているらしい。

そういえば思い出したが、ライラル・フォン・ブリタニアという王の名を聞いたことがあった。

わずか12歳にして王位を得て、國をまとめ戦ではその頭角を示していらっしゃい。

他の国からは銀王、狂王などほかにも様々な通り名があるようだつたが、

この国の住人にとっては英雄と言つても過言ではない存在のようだつた。

ライの父、前王の圧政がよほどひどかったことや、戦で負けがないことなどが関係しているようだ。

城に入り、ライは遠征の間に溜まった書類を片付けるために執務室へと向かった。

そこに私も連れて行かれた。

「わい、エヴァンジエルン、こいつして城に連れて来はしたが。

とつあえず話をしようが。お前はこれからどうしたい?」

「ふん、無理やり連れてきたやつとは思えない口ぶりだな。王様?」

私が皮肉をこじめてこいつを睨み、ライは笑いながら答えた。

「無理やり?違つた。間違っているだ。エヴァンジエルン。

手を取つたのはお前だろ?」

その言葉にわたしあはへつと喉を詰めた。

たしかに、その通りだった。

「やうだな…お前がどうしても嫌だと」から出たいなら考えてやらないでもないが、

私は幾分お前を氣に入っているんだ。できればこの城で仕えてほしいと思つている。」

「仕えて？私がか？嫌に決まつてているだらうそんなもの。」

「まあやうひにな。仕えると云つてもこれは他の家臣たちへの大義名分だ。

「やうだな。實際は好きに過ぐしてもうつて構わない。

ただし条件としては、サクラ…私の妹なんだが、その子の話し相手にでもなつてやってほしい。

年も近やうだ。さつとサクラもお前を氣に入るだらう。われさえしてくればお前の生活は保障しよう。」

なんだその条件は……意味がわからない。

会つて間もないといつてその条件はいくらなんでも一国の王の考えとは思えない。

「こくら私が子供だからと云つて、その話は無防備すぎじゃないか

？」

「これでも私は何度も裏切つたり人を陥れたりする者たちの顔を見てきたんだ。

人を見る目は養つてきたつもりだ。私の目は間違つていないと思うんだが……

そうだな……裏切るつもりがあるのか？エヴァンジエリン」

「……ふん。別に私は政治などには興味はないぞ」

その言い方はする」と思った。今までこのように信頼されたことなどない。

だが、悪い気はしなかった。この信頼を裏切ることは私にはできないだろう。

絶対に本人に言つことはないが。

「わかったよ、その条件にのつてやる。

私としても一ヶ所に留まるのはありがたい。

ただし私にも条件がある」

「聞こへ」

「私の存在を大っぴらにしないこと」

「ほう?」元より公表するつもりはないが、理由を聞いてもいいか?」

「私の名が世間に公まればあつといの国は困る」といふ。」

「……そつか。わかつた。」

「……何故か聞かないのか?」

「聞けば答えるのか?」

「……質問に質問で答えるのは感心しないな。」

「なれば、聞こへつか。」

「ふん。教えてやりん。」

と私はそっぽを向いた。

「なんだそれは……」

この全てを見透かしたような王から一本とれたことが可笑しくて

私は自然と笑みを浮かべていた。

ライは私を見てなぜだか一瞬驚いた顔をして何かを呟いていた。

そしてその後ライも私と同じように笑っていた。

この男ならいつか私が吸血鬼だと言つてもいいかもしねないな。

全てを受け入れてもらえるような気がする。

私は吸血鬼になつて初めて手に入れた日、だまりに心地よさを感じていた。

銀王と吸血鬼2（前書き）

データが消えてしまつたため、書き直しました。SHIDE方式でもない上にデータが無かつたので前とだいぶ違うかと…おおまかにこれは変わつていないと私は思ひます…

銀王と吸血鬼2

私、エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルが城に仕えるようになつて2年が経つた。

まあ仕えると言つても形式だけで、私は普通に過ごしているだけだ。

私を拾つた男、ライは出会つた当時は非常に大人びていたとはいえた少年と言える容姿よつな容姿をしていたが、今ではもう16歳になり、随分と大きくなつたように思う。王としての威厳も増してきたようだ。

そして私は未だ自分の正体をライに明かすことができていない。正直明かす必要はないのかもしれない。だが2年たつた今そろそろ潮流だらうと思う。

そう、私は吸血鬼。不老不死の吸血鬼だ。不老、それは成長しないということ。

私の身体の時間は200年前から止まつたまま、10歳の少女のままなのだ。

2年も経つと、私より小さかつたライの妹も今では私よりも大きくなつてしまつていた。使用人たちも一向に成長する様子を見せない私を訝しんで見てくるものが出ている。この分ではライも不審に思つてゐることは間違ひ無いだらうと憂鬱な気分になつた。

幸いといつべきか、まだこのことを聞かれてはいない。むかひん聞かれたら答えるつもりではいる。だが私の中の何かが言つべきではないと騒いでいるのだ。

これは一体なんなのだろうか。

自分の中のよくわからない感情に思考を奪われていると、突然背後から声をかけられた。

「HガーンジHリン。少し、聞きたいことがあるのだが」

声をかけてきたのは、今現在私を悩ませている張本人、ライラル・フォン・ブリタニアその人だった。

「……なんだ、ライか。なんの用だ？」

私は努めて平静を装い答える。なぜだかわからないがライがこれから聞いてくるであろう言葉を予測し緊張をしている自分がいる。

「ああ、お前の体のこと聞いておきたいことがある。」

「そのことか… そろそろ聞いてくることだと思つていたよ。だが、人目のある所では言えるよつ話ぢやない」

「… そうか。では今夜私の部屋へ来てくれ。見張り番の者には話を通しておぐ。そこだなら誰にも聞かれる心配はないだらう。だが、言いたくないのなら別に無理に言つ必要はないのだぞ?」

「いや… 大丈夫だ。伝えねばならないとは思つていたんだ。… 今夜お前の部屋に向かわせてもらひ」

「… わかった。本当にいいのだな?」

「へへどこや。いいと言つてゐるだらう」

「… では、待つてゐる。また会おう」

そう言いライは公務に戻つて行つた。

ついにこの時が来たのか。自分の正体をライに告げる時が。

これを知った時、ライは一体どうするのだろうか。私を畏怖しつゝかの人間がそうしたように私を迫害するのだろうか。

想像したくはないが、考えてしまう、ライが私にそのような制裁をくだすところを。

その瞬間私の胸に鋭い痛みが走ったような気がした。膝がガクガクと笑い、周囲の気温が下がり一気に寒くなつたような気がした。

やつとの思いで私は自室へ戻り、部屋に入つたと同時についに膝をついてしまつた。そして私は自分自身を抱きしめる。

寒くて寒くて堪らなかつた。この感覚はなんだ？はるか昔に経験したことのあるこの感覚…

そうだ、これは『恐怖』だ。私は怖かつたのだライに恐れられ、嫌われるところだ。

吸血鬼となつて始めて手に入れた口溜まりを失つてしまふかもしないといふことが。

ライに捨てられる？そんな考えが頭をよぎる。もしもそくなつてしまつた場合、私は一体どうなるだろう。生きる気力も失うかもしれない。

夜が来るまでの間、私は自室でいいやうな恐怖と寒さを静めようと、自分自身の身体を抱きしめ続けた。

夜が来た。

そろそろライの部屋に向かわねばならない頃合いだつ。

私は覚束ない足取りでのろのろとライの部屋へ向かつた。言つては通り、今日は見張りのものはいない。

私はドアをノックし返事を待つた。

いつもなら返事も待たずに、むしろ我が物顔で入つてゐるようなものだつたが、今は数秒でも時間を稼ぎたかった。全く、世界を齎かず不死の吸血鬼とは思えない有り様だ。

「エヴァンジェリンか？入れ

ライが返事をし、私は部屋へと入つた。

「めずらじいな。いつもは勝手に部屋に入つてゐる位だと言つて

「…ちよつとした氣まぐれだ。今日は招かれたからな」

「ふむ、そうか。まあいい、そつだな紅茶でも飲むか？」

ライは自分で紅茶を淹れるのが好きだった。メイドにやらせれば良いものを、自室では自分で淹れて楽しんでいる。

「いや、いい。そんな気分じゃない」

「せうか……まあ座れ。それから本題に入らせてもらおう」

ライに促され私は椅子に座る。ライも私の向かいに座った。

「まず、もう一度いっておくが、答えたくないのならそれで構わない。」

「ああ、わかっている」

「……じゃあ聞くが、Hヴァンジエリン、お前この2年身体が全く成長していないな？これは一体どういうことだ？何かの病気だとか、知っていることはあるか？」

「……知っている。これは病気ではない。これは私が……」

真実を告げようとしたとたん身体が小刻みに震えだす。恐い恐い口

ワイコワイコワイ

「 ハ ハ ヴァ ンジ ョ リン ！ ？」

様子がおかしくなった私に驚き、ライが私のそばに駆け寄る。

「 どうした！ ？ 大丈夫か！ ？」

こんなに焦った顔を初めて見た気がする。

「 エ ヴ ア ンジ ョ リン ？ 震えているのか？」

そつとライが私の頬に触れた。冷たいようで温かい、そんな温もりが伝わってきた。

「 ライ……」

その手の温もりを失うのが怖かった。

その蒼い海のような瞳が恐怖に歪むのが怖かった。

その声で化物だと罵声を浴びせられるのが怖かった。

その顔が嫌悪に歪むのが怖かった。

ライがくれたこの日溜まりを失うのが怖かった。

「そうだ私はただの臆病者だ。怖くて怖くて、だけど怖がっている自分を認めるのも嫌で、結果2年もライも自分も欺いていた。」

「ただ、ライに嫌われるのが嫌で、逃げていただけだったのだ。」

「今は、私を心配そうに見つめるこの蒼い瞳が憎悪に歪んだとしても、それは当然の報いだと受け止めよう。」

「そして私はライに真実を述べようとした。」

「しかしその言葉はライに遮られてしまった。」

「「Hヴァンジエリン…お前が何に怯えているのかは知らないが、私はお前を氣に入っている。お前を拾った時からお前が何者であっても受け止めようという覚悟はもつできている。何かに追われているのなら、私はそれから全力でお前を守ると誓おう。」

「お前が何者であっても、私からお前を手放す気はない。それは肝に命じておけ」

「ライのその言葉に私は目を見開いた。」

「ふ…は、なんだそれは」

「その言葉に、言ってみればたったそれだけの言葉かもしれない。」

でもそれは私の心に深く刻み付けられた。

気が付けば身体の震えは治まっていた。

そして私はライに真実を告げた。

私はライに問うた。

「それで、私の正体を知った今、お前は私をどうするつもりだ？ 私をこの国から追い出すか？」

「…おのれこの化け物めが！…よくもこの私を謀ってくれたな、即刻この国から出て行つてもらおうか」

睨みつけ、吐き捨てるように言われたその言葉にひゅっと喉から空気が抜けた。

そんな…さつき言つてくれた言葉は嘘だつたのか、と失望、諦め、悲しみ、どれともわからない負の感情が私の中に渦巻き、だんだんと視界がぼやけてきた。

「…でも私が言つと思っていたのがエヴァンジエリン。さつきから何を怯えているのかと思っていればまさかこんなことだつたとは…見ぐびらないで欲しいものだ」

「つ、な、に？」

「さつきも言つたが、私はお前が何者であつても関係ない。私はお前がお前、エヴァンジエリンがエヴァンジエリンだつたから拾つたのだ。エヴァンジエリン・A・K・マクダウェル個人を気に入つているのだ。

たとえお前が人間ではなかつと、そんなものはどうでもいい。まあ、さすがに吸血鬼というのは驚いたがな」

ふ、とライが笑つた。

その言葉をきき、綺麗で一見冷たくも見えるその笑顔を見て、いままでずっと振り続ける雨から耐え続けていたダムが決壊したかのようにわんわんと泣いてしまった。

ライはそっと私を抱きしめ、私が泣き止むまで頭を撫で続けてくれていた。

「見苦しいところをみせてしまつたな

「構わないさ。元々は演技だつたにせよ、私が言いすぎてしまつたのが悪かったのだ。すまなかつたな。」

「なつ！私がその程度のことではなくはずがないだらう……！」

「さて、私がアレを言った瞬間、捨てられた子猫のような顔をしていたぞ。なあキティ」

「誰がキティか！！」

「キテイだらうへ。」

「やうだが……やうではない……もう……」

と私は吸血鬼について詳しく述べることにした。

「そうか、不老不死の吸血鬼とは……流石に驚いたが、ありえない話ではないのだろうな」

「それにしても随分あつたり信じるのだな?」

「まあな。嘘だつたのか?」

「いや、嘘は言つていなが……」

随分とすんなり信じるので拍子抜けしてしまった。

「世の中、奇想天外なことなど身近にあつたりするものだからな。実際、私も不思議な力を持つている」

エヴァンジエリンが言ったのだから自分も言わなければフェアではないとライも自分の力、ギアスと言つものについて教えてくれた。

それは私も知らない謎の力で妹と母を守るために見てに入れたのだとライは言つ。曰く出会つたばかりの頃に一度かけただとか、一回使つた相手にはもう使えないとか、そんな力があるのだから吸血鬼くらいいても不思議ではないだろうとか、わりと詳しいところまで教えてくれていたように思う。

私は魔法のことまでは話さなかつた。国をおさめる王が魔法について知り、魔法界と関わりを持つてしまつと、ややこしいことになりかねないと思ったのだ。

「それで、本当に似つかうる気なんだ？」

「どうもしなしさ。いつもどおりで構わない。使用人たちにはそうだな…そういう病氣だとでもなんとでも言つておこつ。身体のことで変な目で見てくるものがいれば私に言え、私から直接言おつ」

「だが…吸血鬼だぞ？お前は頭はキレるがどうも楽観視し過ぎる部分がありはしないか？吸血鬼というのは人間の血を吸い生きるものだぞ？気がつけば国が滅んでいるといつことだってあり得るとは考えないのか」

「」の2年、誰かが襲われたなどといつ話は聞いたことがない。もし本気で滅ぼす気ならば、正体を明かさずともそのまま滅ぼすことができたはずだろ。それこそ私の知らぬ間に。それとも、お前は私の国を滅ぼしたいのか？」

「……そんな訳はないが、お前があまりにも吸血鬼といつものを見ているような気がしてだな」

「ふふ、お前は私に追い出されたいのか？ そうだな、まあ私はお前を信頼しているからな。だが、そういうば實際お前は血を吸つていたのか？」

「いや、吸つていない。私は特別な吸血鬼だからな、別に血を吸わなくとも困らん。」

「それは……吸血鬼といつていいものなのかな？ 血を吸つから吸血鬼なのではないのか？」

「たしかに、血を吸わねば力は衰えていくが、襲われる心配のない今、それほど重要なことではないわ」

「ふむ、そろそろ腹が減つて限界だというのなら私の血を吸わせてやろうかと思つていたが、心配無いようだな」

「なに？」

「どうかしたか？」

「今血を吸わせると言つたか？」

「言つたが？ それがどうかしたか？ 腹が空いたと国民の血を吸われてはたまらんからな」

はははとライが冗談めかして言つ。

「いや、その、吸わせてくれるといつなりありがたい… のだが」

この2年全く血を吸つていない。普通の食事をしてもエネルギーは補給できるが言つてしまえばそれだけだ。吸血鬼として無性に血を飲みたくなる時だってある。魔力も底をついているに等しい。

「ほう、死なない程度なら別に構わない、まあお前が私を殺す気で来るとはどうも考えられんがな。それにまず吸血鬼といつものに興味もある」

さあ、どこからでもかかつて「ことでも言つたの」といひよは椅子に座り両腕を広げた。

これがカリスマというものか、こんな時でも王様オーラが半端無いと思つたことはそつと心にしまい、私はおそるおそるライに近づいた。

さて、どうするか、別に腕からでも吸えるのだが、ここは吸血鬼らしく首筋からいただくこととした。

そしてライの首元を血が吸いやすいように開き、そつと牙を立てた。

「ひ

痛かつたのかくすぐつたかったのか、ライがわずかに身じろいぐ。

私も2年ぶりで、しかもそれがライの血だといつともあり期待と興奮が隠せなかつた。

美味い。ライの血はこれまで飲んだことのないほど美味しいだった

普通の血をまるで数10年、数100年寝かせたワインのような美味しさだ。しかし、だからといって、吸血をやめないわけにはいかない。

わたしは最後の一滴まで逃してたまるかといつよつと、牙を突き立てた傷口を舐め上げた。すると傷は一瞬で消えてしまつ。

「つ傷が…ない。すごいなこれは…でも少しくらいはある」

「すまない、あまりにも美味かつたからついつい飲み過ぎてしまつたようだ。」

「血が美味しいと言われても、なんともしつくつにないな、普通と違うのか?」

「全く違う。王族というだけでも相当なものだが、それにかなり珍しいハーフという要因が加わってより一層だ」

言つ訳にはいかないが、なぜか魔力の量も相当だった。

「そういうものなのか、まあ腹が減つたらまた来い。体調が良ければ吸わせてやる」

「…………ありがとう」

「構わない。だが、今日は少し疲れた、もう休むこととする」

おやすみ、トライはベッドに入った。

公務の時には一切隙を見せないこの男が、無防備にベッドに入り眠ろうとしている姿を見て私は頬が緩んだ。信頼されているのだという気持ちが伝わってきて嬉しかった。

そして私もトライのベッドに入り込んでやつた。正直私は夜は眠る必要はないのだが、この際どうでもいい。

「うわ、なんだエヴァンジョン

「ふふふ、今日ぐりいいだろう

「…構わないが」

「おやすみ、トライ

「…おやすみ、キティ」

この日私は生まれて初めて温かい夜を過いした。そしてこんな日常がずっと続けばいいと、そう思った。

その後吸血した日は一緒に寝るところがついたのはいつまでもないだろ。

銀王と吸血鬼2（後書き）

おおまかなどいろは変わって…ないです…よね?
かなり不安ですが、もうこれ2話とするしか…汗
1、2、3話と読んでいつて書き方が違うのは多めに見ていただけ
ると幸いです。

ご感想、評価等ありましたらよろしくお願ひします。

銀王と吸血鬼3

side · ハヴァンジエリン

私が吸血鬼とライに正体を明かしてから1年が経つた。

この1年でこの国を侵略しようとする輩が増えてきた。ライ自身は他国を侵略する気は全くない。そうなのだが他国はそういうわけではないらしい。

この地を手に入れ、自分たちの領土を拡大したいようだ。

こちらは何もする気はないにも関わらず、容赦なく襲つてくる蛮族たちにライは神経をすり減らしている。

もちろん態度にはつきりと出しているわけではないが、時折疲れた顔をしているのだ。

こちらは何もする気はないのに襲われてしまつて、3年前までの自分を見ているようで実に歯がゆい。

さういひは私のときとは違い、

戦には勝つても、それでもどうしても被害は出てしまうのだ。最近もライに近しい騎士がライを守るために命を落とすところ

があった。

ライは戦略指示も出しつつ、前衛で戦つ王だった。そのため騎士からも慕われてゐる。

ライは王として国民や、臣下、騎士や兵の前では毅然と振舞つていつたが、それでもやはり粗野にたえていふようだつた。

なぜならライは私に一回だけぼつと聞いたことがある。

「あの時私が討ち取られていれば、この長い戦も終わり、これ以上被害を受けることも無くなつていたのだろうか……」

私は慌てて叫んだ。

「何を言つてゐるー？あんな見境なく国を襲つてくるよつた蛮族に国を乗つ取られてでもみる。

どうなるかなんて目に見えていゐだらうー！？

それに……お前が死んだら……！」

「ああ……すまない。ちょっと今日は夢見が悪くてな。感傷的になつてしまつたようだ。

もちろんわかつていね。私は妹と母上を置いて死ぬわけにはいかない。」

「……わかつてゐるならこ。もつ一度そんなことを言つてみる。

張り倒してやる。」

「いじとは言つたが妹と母親のためだけとこいつのが少し…不満だった。そのために王になつたのだといじとはわかつてはいるが、もう少し何かあつてもいいんぢやないかと思つ。

何がとは言わなが。

ライは笑いながら

「それは怖いな。張り倒されないためにももつ弱音は吐かないこととじよづ。」

といい仕事に精を出していた。

あいつは本当に大丈夫なんだろうか。

最近は顔色も悪いみたいだ。

びつしてだらうか。

ライの調子が悪うだと気になつて仕方がない。

それでも今度死ねよかつたなどと言つたら張り倒すだけでは済みやしない。

無理やりにでも吸血鬼にして死なないよつてひやわつか……。

ん? ひょっとこ考えかもしない。

side · ライ

最近北の国家の攻撃がやむことがない。砲弾の音が耳から消えることなく。落ち着ける日がないと言つても過言ではない。

私は侵略する意思がないことを伝えていたのだが、彼らにはそのようなことは関係ないらしい。

終わることのない戦に、兵士や騎士たちも疲れているのが目に見えている。

このままではまことにわかつていいのだが、こひりて侵略する意圖がない以上、

彼らの攻撃を受け流すべししか対応できる手段がない。

近しい騎士が命を落としたときに一度だけエヴァンジェリンに弱音を吐いてしまったことがあつたが、

そんなものは一蹴されてしまった。

そうだ、わかつていい。私はまだ死ぬわけにはいかない。

母上と妹が生きていい限り、私は一人を守らなければならぬのだ。

いや一人だけではなかつたな。エヴァンジェリンや、私を慕つてくれている騎士や国民たちのためにも私は闘わなければならぬのだ。

私は王だ。たとえ戦の終わりが見えなくとも、兵が最後の一人になるととも、

私はそれを守り、戦わなくてはならないのだ。

それが私を守るために命を落とした騎士や兵士たちへの責任であり義務である。

頭では理解していても、思うようにできないのが人間といつものか。

最近は夢でまで蛮族たちが襲ってくるようになっていた。

しかもその夢の内容は最悪で、次々と私の目の前で、私の大切な人が消えていくのだ。

やめろ、やめてくれ。なぜ襲ってくるのだ。私は何もしていないではないか。お前たちと戦う気はない。

頼むから私の大切な者たちを奪わないでくれ！

サクラ！母上！ヒヅアンジヒリン！！

そして皆消えていく

いつもいつもこの悪夢で目が覚めてしまふ。おかげでぐぐに眠れたものではない。

今も眠つて一時間経つていなかといつからで思わず飛び起きてしまった。

この夢を見た後は眠ることもできず、いつも作戦を練つたり、本を読みだりして過ごしてくる。

また「」の夢かと辯つを見回すと、ナリシナはハヴァンジヒロンがいた。

一応見張りの兵はいるはずなのだが、いつも仮がつくとナリシナは

ことがある。

吸血鬼にはそんなもの通用しないところわナカ……

一体どんな手を使つてこるのだか。

それよつも今こりこりとこりこりとせ……

参つた。

「どうした? ハヴァンジヒロン。また血を飲みに来たのか?」

「そのつもつで来たんだが、せつせつせつめでおべ。」

「……やつか。」

そしてじぱりく沈黙が続いた。

「おい。」

先に声をかけたのはエヴァンジエリンだった。

「ライ、お前、最近眠れているのか？随分とつなされていたぞ。」

「……やはり見られていたのか。そうだな。眠れていると言えば嘘になるか。」

「ライ……お前……。」

「心配するな。大丈夫だ。仕事ができるくらいには眠れている。」

「だが……顔色が悪いぞ？」

「大丈夫だ。」

「……。」

「……。」

困った。じつなるとエヴァンジエリンは諦めない。

少なくとも納得できる答えを返さなければ動くことがない。

「……あまり、大丈夫ではない。」

「…………。」

「……大丈夫ではない。」

「もうやめようかな。」

「いやねは言わせたところ。」

「えりありでも違つと思つんだが……。」

「ええ……。わねわこ……。細かい」とせこー！

今問題にあるべき」とは、お前が大丈夫でないとこ「」とだー！

「大丈夫だと言つているだらう。」

「嘘をつくな。そんな顔で言われても説得力など無い……。」

「そんなにひどいか？』

「ああ、ひどいな。見ていろだけでこちらが倒れてしまこやつなまどこな。」

「何を馬鹿な……。」

「『』がかかる。話せ。なにを苦しみでこる？』

諦めてくれる気はなによつだ。仕方がない。正直に言つてしまつか
……。

「夢を……見るのだ。皆が蛮族に殺される夢だ。

おかげで1ヶ月、ぐぐぐに眠れたものではない。

ビビビ、ビビビになくなつてこく。ヒカランジヒリン、お前も
だ。

私は見てこるだけでもいいかもでもできないのだ。そして最後に私
だけが残るんだ。

いつも同じで目が覚める。」

「そんなもの、ただの夢だ。」

「わかつてゐる。だが、この目が覚めた後にも続くこの恐怖は本物
なのだ。

まだ皆生きてゐる。だがあれはいつか起つて得る未来かもしれない。

こんな日が来るような気がして、お前たちを失つたがたまらなく
怖いのだ！」

いつのまにか私の体はふるえていた。

心の底から湧いてくる恐怖が寒さに変わったかのように私はふるえていたのだ。

言葉にしただけでこんなにも恐ろしくなるとは思わなかつた。

情けない。一国の王ともあるものが。

寒い、凍つてしまいやうだ。

side · ハヴァンジリン

田の前で身体を縮めてふるえているライを田の前にして、私は内心驚いていた。

いつも冷静で毅然とし弱さを見せないこの王が

今、ベッドの上で独りが怖いとふるえているのだ。

まるで昔の私のように

私はそんなライを見るのがとても辛くて
しかしそれと同時に

無性に愛おしいと感じていた。

王として民をまとめる姿も、

戦のときにも冷静に状況を判断し、

的確な指示を与え戦う姿も、

不敵な笑みも、

無自覚な優しさも、

時折みせる天然な行動も

家族にだけ見せる微笑みも、

そして今こうして初めて見せた弱さも、

そのすべてが愛おしい。

今気がついた。

きっとここに拾われた時から

私はライに惹かれていたのだと思つ。

ライが愛おしくてたまらない。

ははっ、なんだ、私はライを愛していたのか。

だからここにちょっとした顔でも気になつて仕方がなかつたのだ。

そして私は目の前で子供のよつてふるえているライを

強く抱きしめた。

「心配するな。それはただの夢だ。そんなことが起らるわけがない。

なぜならまずありえないことが起らるるだ。

私が消える訳がないだらつ？吸血鬼だぞ？真祖の吸血鬼にして不老不死の

このヒューマンジヒリン・A・K・マクダウェルが、消えるわけがない。

私は一生お前とともに生きると誓おつ。こまちら離れると言われても離れる気などないからな。

先にそう言ったのはお前だ。覚悟しろ。」

と私は不敵な笑みを浮かべた。

気がつけば、ライのふるえは治まっていた。

「つま、これでは一年前とは立場が逆だな。

あつがとう、ヒューマンジヒリン

」

恐怖は無くなつたが、

蛮族の攻撃はさうに激しさを増し、昼夜問わず戦が続いていた。

「半年、夢を見る」とはなくなつたが、今度は夢を見る間もない。

蛮族は四方八方から攻め込んできて、日本兵の数も減りこれ以上減つてしまえば勝ち目はなくなつてしまいそうだ。

激しくなる戦に比例して使うギアスの回数も増えている。

やはり防戦だけでは限界があった。

侵略するしないの疆界ではない。そのままではさうは負けてしまふ。

もう限界だ。あんな国、滅びてしまえばいい……。

次はこいつから攻め込んでやる。

そして今日は演説の日だ。政策を変える以上国民への演説は必要だ。

「我が民たちよ……聞け！！

」

そして演説を始めた。

演説を始めて数十分が経過したとき、突然鐘の音が響いた。

この鐘は敵襲の合図だ。しまった、こんなとき。

どうすれば……

どうすれば……

考えを巡らせてみると騎士の隊長に声をかかられた。

「陛下……どういたしますか！？」

しかし「今は演説台の上だ。国民に慌ててこのままなど見せるわけにはいかない！

国民の不安を煽らないためこもじりて勢いがある」と見せつけねば……

「愚かな北の国家が我が領土を汚している……」

やひひを

監殺してじろ……」

なんだ！？

今のは！？

ライが叫んだ瞬間に巨大な魔力を感じた。

何が起こった！？

「皆殺し……」

「奴らを皆殺しに……」

国民、騎士、使用人、この国のですべての人間が口々に呴き武器をつ
とつて國の外の蛮族の元へと走っていく。

何だこれは？

異常だ。何が起こっている。

そう思つていると、國民たちはたちは私に襲いかかってきた。

とつもの」と驚いたが、魔法で氣絶せさせておいた。

「うだ、『ライ』は…？」

あわてて『ライ』の元へと駆け出した。

「『ライ』…」

「やめ…。今のま違…！」

「行くんじやない…！」

『ライ』は必死に暴走する彼の足止めしようと走りこんだ。

「『ライ』…。一体何をした…？」

「『ハガーンジ』…。無事だったのだな…！」

「これは…。おや、…。ギアスの暴走だろ…！」

奴らを監殺したことじりとこ「ギアス」が……

かかってしまったのだ!!

「暴走だと…? そんなことがあるのか…?」

「わからない…!…だが…!…

「そつだ、母上とサクサクはなつてこむー?」

「ライが叫んだ。こんなに取り乱したライは初めて見る。

「ヒュア ンジュリン、お前はここから逃げる。この国は、もう……。」

「何を言つてこむー? お前も一緒に逃げる。」

「私は母上と妹を探さなければならぬ。」

「それなら私も手伝ひー!…

「これは私が起こした問題だ。

「私に片付けをしてくれ……。」

「つだが!…」

「お願いだ。私が言つた愚かな一言で起こつた争いに

お前まで巻き込むのは嫌なのだ。

わかつてくれ。」

わかるわけがないだろ？！

だがライは本当に辛そうな顔をしていた。

そんな顔をするな……。

わかつたよ……。

「……1時間だ。それだけ待つ。何もしない。

だが1時間経つたら必ずお前を引きずつてでも一緒にここから逃げるからな。」

「お前は本当に、厳しいな。

ありがと。」

「絶対に、死ぬんじゃないぞ。

お前が死にそうになつたら、私の眷属にしてやるからな。」

「ふつー！遠慮する。」

そしてライは外に飛び出でていった。

「……」が厳しいと言つんだ。全く。

甘すぎるとへらいだ。

本当は今すぐにでも引きずつてでも逃げたかった。

ライが守ろうとしていた人々が、我を失つて蛮族へと襲いかかるさま。

そして崩れ落ちるさま。

そんな様子を私の方がライに見せたくなかつた。

「ライ……死んだりしたら私は絶対に許さないぞ。」

しかし、たつたの1時間、されど1時間

この1時間は私にとって地獄のような時間だった。

國中がギアスにかかつたといふことは

私の母上も妹も、例外なくギアスにかかつてしまつたといふことだ。

早く見つけなければ、

だがしかし、どうすれば? ギアス取り消すことなどできはしない。

できないとはわかつっていても私は一人を探さずにはいられなかつた。

どこだ? どこに行つた?

私はあちこちで戦闘が起つてゐる中がむしゃらに走つてゐた。

外は蛮族や國民、城の兵士、使用人で溢れていた。

蛮族は国民まで襲つてきたことに困惑していたが、敵には変わりないため容赦なく斬りつけていた。

なんと云ひうるだ

私があんなことを言つてしまつたために……

私の愚かな一言が、このような結果を生んでしまったのだ……

そんな中に見知った人影を見つけた。

母上と妹だ。数百メートル離れたところで、蛮族達に向かつて走つてゐる二人を見つけたのだ。

私は即座に駆け出したが、間に合うはずもなく、目の前で母上と妹が切り捨てられる様を走りながら見ていくことしかできなかつた。

それはまるでスロー・モーションのように見えた。一人の腹を、胸を、腕を、刃が襲う。

そして二人は崩れ落ちた

その瞬間、私の世界から色が消えた

足に力が入らない。私はそのまま地面に崩れ落ちた。

「ふふ…ふ、
ふはははははははははははははははははは
ははははは

私はつ、何のためにつ、この力をつ、ギアスを手に入れたのだ。

一人を守るためにではなかつたのか？

（そうだ、母と妹を守るために全てを犠牲にして力を手に入れた）

では「Jの結果はなんだ?」

（みんな、みんないなくなつた。私が守りたかつたものはすべて）

そうだ、私が殺したのだ。

二人を、

この力で

私は叫んだ。
よかつた。
周りに蛮族が集まつてきただが、そんなことはどうでも

ただただ叫んでいた。

そして私に母と妹と同じように刃が降り注いだ。

ああ、エヴァンジエリン、すまない。約束は守れないようだ。

約束の時間だ、急いでライを探さなければ…。

魔法の秘匿などどうでもいい…空からライを探すことにした。

嫌な予感がする。

魔法使いの勘つてやつは、当たるから嫌になる…！

たのむ、生きていてくれ…！

そして私が見つけたのは戦場の真ん中で倒れているライと、その周りを囲む蛮族の姿だった。

猛スピードでライの元に飛んでいく。蛮族へと無詠唱魔法を放つたがもはやそれとスピードは変わらない。

全力でライの元へ飛んで行つた。

「ライ…！」

蛮族を無視してライの元へと駆け寄る。ライの周囲にはライの血の海ができていた。

「ライ……田を開ける……

私を独りにするな……約束を忘れたのか！？

おい！…ライ！…！」

まだかくじて息はあつたがライの顔は青白く、田を覚ます氣配がない。

血を流しそぎている……」のままでは……

どうする！？ 一か八か、私の眷属にしてやるつか！？

後でライになんと言われようと、先に約束を破つたこいつが悪いのだ。

そう考えを巡らせてると蛮族が襲いかかってきた。

銀の刃が私を切り裂いた、

邪魔をするな。

このままでは何もできないつ。

そつだこつらがライをこんな田上……

切られても平然と立っている私を見て、蛮族共は恐れ慄いた。

「こつらなどに……ライがつ

「 よくもつ。」

その瞬間私の理性ははじけ飛んだ。

気がつくと辺り一面血の海だつた。もはやそれがヒトであったのか
もわからない。

自分の手を見ると赤黒い血に染まつていた。

私がやつたのか。

はつとしてライを見た。

それがひとつも虫の息だ。

あわててライの元に駆け寄った。

「ライツ！ 目を覚ませ！ ライツ！」

「つ……ヒ……ヴァ……？」

「つライ！！死ぬんじやないぞ！！」

苦手だったために回復魔法を覚えていなかつたことがたまらなく悔しい。

ライが私の頬に手を伸ばしてきた。

私は慌ててその手をつかむ。

「な……く……な

すないひとつにやせて咲く」

ライからどんどん血の気が引いていく。

「あやまんな！…あやまんな…なら生きる…お願いだ！」

私の眷属になれ！文句は生き残つてから聞く！

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

ライがいなくなるなんて！！

やつと見つけたんだ！安心できる居場所を！――

「わ.....しは.....も.....い.....だ.....じょひ.....ぶ.....H.....ウア.....な.....り
す.....ぐこ.....」

「大丈夫なわけがないだろう！？お前が死んだら！？私は！？私は！？」

また独りぼっちになつてしまつぢやないかつ。

「叶わぬ」の歴史

「…………わせに…………な…………て…………れ」

ライの首筋に牙を立てようとしたその瞬間。

ライは力尽きた。

間に合わなかつた。

そこから何をしたのか覚えていない。

ずっと泣いていたような気もあるし、我を忘れて残った蛮族共を全て片付けたような気もする。

あるいは両方か。

気がつけば、私は行くあてもなく、ライの元から去っていたのだった。

「ライ……大嘘吐きの名の男……

私は一生忘れないからな……。」

side · · · ·

「 おやすみ。」

銀の王よ。

お前には契約を果たしてもらわねばならないのだ。

いいで死なれるわけにはいかない。

今は眠れ 全てを忘れて

再び田覚める時が来る、その田まで。

side・ライ

「逃げなければ……っ」

僕は無我夢中で走り続けていた。

そして気がつくと田の前には大きな建物があった。

そう言えば途中、門を通りたよつた気がする。どこかの敷地内に入つてしまつたようだ。

そうだ、追手は？と辺りを見まわしたが誰もいない。

さすがにもう追いかけでは来ていらないらしい。

「それにしても……いいな……いいだ……。」

辺りを見回しながら考えていると、誰かが近づいてくる気配がした

僕はとつとて草陰に身を隠した。

side・タカミチ・T・高畠

「さて、侵入者はこのあたりに来たと思つんだけど。」

僕は先ほど門から何者かが侵入したとの報告を受けてきた。

門から侵入したということは、もしかすると魔法関係者ではないかもしぬれない。だが、ただの不審者だったとしても

もちろん看過することはできない。

いずれにせよ、とにかく見つけて捕まえるべきだらう。

「うう……！」

近くの草陰からつめき声が聞こえた。

近くに駆け寄ると、そこには、拘束衣といつのだらうか？そんな服

を来て倒れている銀髪の少年が倒れていた。

おそれく、高校生ほどの年齢だろう。彼はどこか気が失い今は動く気配がない。

何か不思議な感じはするが、魔力といつものは感じなかつた。

（仕方がないな……話は彼が田を覚ましてから聞くとしようか……。）

といつあえず僕はこのことを学園長に報告し、少年を担いで近くの医務室、麻帆良学園女子中等学園の医務室に運ぶことにした。

さつきは突然頭痛に襲われあまりの痛みに意識を失ってしまったのだ。

ぼやけていた視界がはっきりしてみると、近くに女性と男性がいるのが見えた。

「…………」

「目が覚めたのね？」とは麻帆良学園女子中等部の医務室よ。」

髪の長い眼鏡をかけた女性が答えた。

「麻帆……良学園……？学校なのか……？」とは……。

「ああそりだよ。」

今度は眼鏡をかけた中年らしき男が話しかけてきた。

「ああ、源先生、ちよつと席をはずしてもうひとつへ。」

「はいはい、わかりましたわ。」

男は女性に席をはずしてもう一、僕に話しかけてきた。

「君が校舎の近くで近くで倒れていたのを連れてきたんだが、

君はどうしてあんなところにいたんだい？それから、

まず名前を教えて欲しいんだけど……。」「…………名前…………。

僕の名前はライ……です。」

「ライ君か。僕の名前はタカミチ・ト・高畠。Iの学園の広域指導員をやつている教師なんだ。

好きなように呼んでくれて構わないよ。

それで、君はどうしてあんなところにいたんだい？それにその服、拘束衣つてやつだと思うんだけど、

どうしてそんなものを？」

「…………わからない。気がついたら、逃げていたんです。ここへ来て、突然頭が痛くなつて……

目が覚めたら……」「…………

「わからない？」

「…………はい。」「

「まさか、記憶喪失ということかな？」

誰から逃げていたのかもわからない。

わかるのは名前と知識だけ。他のことは全く思い出せない。

覚えているのはギアスという不思議な力のことだけだ。

そんなことは言つわけにはいかないが。

「わからない……。名前と生活に必要な知識以外は何もわからないんです。」

「そうかい……困ったな。本当に記憶喪失ってやつみたいだね。

ちよつと待つてくれ。学園長に相談してみるよ。」

タカミチさんはそう言つとケータイを取りり出し、学園長とやりとり電話をし始めた。

僕のような不得体のしれない人間がこんなところにいるのはまずいだろ？

僕がすぐに出ていけば済む話だ。

そつ思い僕は起き上がりつとした。

「ええ！？学園長！？本気ですか！？」

突然タカミチさんが叫んだ。

「 はい、

はい、

そうみた

「 いですが。」

なんだ？

何を話しているんだろ？ が、タカミチさんは相当驚いているようだ。

そしてタカミチさんは電話を終え、僕に話しかけてきた。

「 ライ君。 頭はこれからどこに行くあてはあるのかい？」

「 いえ、あつませんけど.....。」

「 な、な、どうだう？ 記憶が戻るまでの学園ここのみのことは？」

「 う」 へありがたい提案ではある。

だが、何を言っているんだこの人は.....

「 うこののは普通警察とかに持つていいのが筋なんじゃないのか？」

「 いえ、僕みたいな不得体のしれない人間がこんな学校にいるべきでないのは、

記憶がなくつたってわかりますよ。

何を言つているんですか？」

そういうとタカミチさんが困ったように笑いながら答えた。

「僕もそう思うんだけどね、学園長がさつきの質問に君がそう答え
るような人物なら

この学校で預かってみようじゃないかと言いだしてね。どうやら君
は学園長のお眼鏡にかなつたようだよ。

見たところ、誰かに追われていたようだし。その服を見ても、よほ
ど特殊なところから来たんだろう？

「このまま君を放りだすのも危ないだろ？しね。」

「……僕が危ない側の人間だとは考へないんですか？」

「ははっ、困ったことに、学園長の勘はよく当たるんだよ。」

そんな……勘なんかで決めていいことなのだろうか？これは…

「でも……。」

「大丈夫だよ。もし君が本当に危険人物なら、その時は僕が相手を
する。」

「相手？」

「うん。君が危険人物だとわかつたら、容赦はしないよ。」

「何かあつてから危険人物だとわかつたらどうする気なんですか。

それから止めても遅いですよ。」

「そうだね。とりあえずそういう話は明日、学園長室でしよう。

君も調子が悪そうだ。今日は眠るといい。」

「だから、その間に何かあつたらどうするんですか。」

「そこまでして君は自分を危険人物だと思つて欲しいのかい？」

「… そういうわけじゃありませんけど……。」

「ははっ、うん、僕も学園長のよつて君が悪い」とするよつて思えなくなつてきたな。

これでも、僕も勘はいい方なんだよ。

とにかく今は休んでくれ。

おやすみ。また明日迎えに来るから。」

そう言ってタカミチさんは医務室から出て行つた。

何を考えているんだ… この学園の偉い人は…

そんなことを考えながら僕の意識は眠りの淵へと落ちていつた。

翌朝、目が覚めると医務室にノックの音が響いた。

「はい。」

返事をすると、タカミチさんが入ってきた。

「おはよう、ライ君。よく眠れたかい？」

「はい、おかげさまで。体調も随分良くなりました。

「それはよかったです。じゃあ、今日は学園長室に行こうと思つただけで、その服じゃあちよつと出歩けない。

僕ので悪いんだけど、とつあえずこれ着てくれないかい。」

そつ言つてタカミチさんは僕にスーツを一式を渡してきた。黒を基調としたじく普通のスーツだ。

「ありがとうございます。」

礼を言つて僕は服を着替えた。

着替える時、タカミチさんに僕の身体をまじまじと見られた。

「……なにか？」

「ああ、こや、かうくい筋肉の付き方をしているなと思つてね。

まるで歴戦の戦士のような体つきだと思つてね。いや、歴戦の戦士にもやうじとな体つきをしている者はいないだらうな。」

「やう…なんですか？」

「ああ、せひともせ合わせ願いたいよ。」

「…その時はお手柔らかにお願いします。」

そう言えれば戦闘に関する知識もあるようだ。あらゆる武術や武器の使い方まで。

それにしてタカミチさんは歴戦の戦士の身体を見るような機会でもあるのだらうか？

それに、それが本当だとしたら、一体昔の自分は何者だったんだろう。

しかし、やはり思つだらうとしても、頭に霧がかかったかのよう何も思い出せなかつた。

そして学園長室へと向かつため、校舎内を歩いていたが、生徒は見かけない。

今日は休みなんだろうか。

「タカミチさん。そう言えば、今は何曜日なんですか？生徒を一人も見かけませんけど。」

「ああ、今日は日曜日だよ。」

田曜日か。道理で誰もいないわけだ。

そして僕は学園長室に着いた。

タカミチさんが失礼します、と中へ入った。続けて僕も中に入る。

「学園長。連れてきましたよ。」

「ふおふおふお、御苦労じやつたな、高畑先生。

さて、君がライ君じやな？わしはこの麻帆良学園の学園長を務めておる近衛近右衛門じや。

よろしくな、ライ君。」

中には、学園長。近右衛門と名乗った老人がいた。

まず、頭に田たが行いつてしまつたが、不可抗力だ。

「まあ、君の遭遇を決めたいと思つのじやが。」

「遭遇、ですか？そんなこと決めていただかなくとも……。」

「ふおふおふお、まあ、そう嫌がうとむ。

「うじやな、何から話はなつかの。

では、ライ君。君のことを調べさせてもらつた。

これでもわしにはあちこちに「コネがあるんだじやよ。少なくとも君の失踪履り歴れきなどは出でていないよ」うじやつた。

警察に突つき出だしても仕方のないことじやつ。ライとこの顔前がほだけではさすがに戸籍どせきも調べられんから。

行くあてもなこのうじやし、この学園で廻まわすとこ。

普通に過くぎしてこのうじやし、記憶きおくが戻もどることもあるじやうひうひ、記憶きおくが戻もどつたらあとは好きなようにしてもううつて構かわんよ。悪あくこのうじやうじやはせんせん。

たしかに行いくあてもない。それでも書かつてくれるのなませ僕ぼくも断だんる理由はない。

これ以上ない、ありがたい話である。

「……では、よろしくお願ひします。」

「ふおふおふお、つむつむ。よろしく、ライ君。

では君の処遇についてこいつか案があるのじやが。

まあひとつ、見たところ君はまだ高校生ほどのよじりや。

この学園の高等部にでも編入してもいい。

そこにに行くのであれば、残念ながら寮は一杯じやから学校の近くのクラブハウスに住んでもらいたい。

そこにはちょっと事情のある兄妹が一人住んでおるが、部屋は空いておるし、問題はなじやうつ。

「事情……？」

「つむ、妹の方がちょっと身体が不自由でな、学校の近くに住ませておるのじや。

それから、つむ、君も自分のことが信じられないことよつてあれば、こちから見張り兼お世話係でもつむよつておる。

その場合、ちよつと法律の方は置いておいて、君を女子中等部の副担任にしたいと思つ。

担任は高畠先生、じゅしそのクラスの生徒の中には君の見張り兼お世話をするのにけつどいこ者たちがたくさんある。

住まいはそうじやな……女子寮、せつしき言つたクラブハウス、それから宿主に断られなければ森の方にログハウスがある。

まあ、最後のは確實に断られるじゃろうがな。

ビービーヤ？

君はビビうじたじ？

女子中等部で副担任？

突拍子もない話である。知識は少なくとも大学卒業レベルは入つて いるようだ、知識についての問題はなさそうだが……。

高校生活を過ごすか、副担任をするか。

それに見張りか……、自分でも自分の得体が知れないのだ。確かに誰かに見ていたもられた方がいいかもしない。

それでも

「あの、お世話係と並つのは？」

「ああ、君は「J」の学園について何も知らないじゃねえからな。学校の案内や周辺の案内などを任せたいと思つておる。

「J」の学園は広いからのお。「J」の学園を見て回るだけでも結構な刺激にならねじやうつて。」

やつこひとか。

あつがたいことだ。

なら僕は、

「

。」

side・ライ

高校生活か副担任。

どちらを選ぶか。どちらも利点はある。

高校生は、本当に普通に過ぐることなく、とてもここに日常を過ごすことができる。学生として世話になれば

が、副担任の場合、給料も出るやうだ。学生として世話になればかりでは申し訳ない。

ここは、働ける方を選ぶ方がいいかもしない。自分の存在もよくわからない今、

それに対応できる人間がいるといふのもことだらけ。

だから僕は

「では、副担任の仕事をしたいと思います。」

知識もすでに大学卒業レベルほどはあるみたいですし、

高校で勉強を学ぶ必要もなさないです。」

「ふおふおふお、わうかそれは都合がここいつ。了解したぞい。すぐにもそこいつ手続きを進めるから、明日こは高畠先生のクラスに行つてもううぞい。」

今日はとりあえず生活に必要なものを買つとい。

お金を渡しておへやい。後で案内役をつけよ。

といひで、ライ君はどこに住みた?」

住む場所……か、正直眠る場所さえあればどこでもいい。

ただ、女子寮だけはあつえないな。

「女子寮以外で、

眠れる場所さえあれば僕はどこでも構いません。」

「まつ?女子寮じゃダメか。残念じゃのう。」

ふおふおふお、と学園長はあじひげを撫でながら言った。

残念？意味がわからない。

「残念とは？」

「ふむふむふむ、いや、その方がおもしきりがござりへ。」

「僕はその言葉に渋然とした。おもしきりを求めていたのが、この人は。

「ふむ、ではとつあえず、高等部にあるクリップハウスよつは近いじやうつ

森のログハウスの方に当たつてみるかの。

「どれ、ちょっと待つておれ、連絡してみるから。」

「いや僕は

」

別に遠くても構わなこと言おひへしたが、学園長は電話を始めた。

「おひ、ヒカルンジンヒン、わしじゅわじ。
いやいや今まで切るな切るなー詐欺じやのひで、近衛近右衛門じ
やーー！」

「どこの、今田せおせに頼みがあるんじやが、聞いてもらひえんかの？」

「む、実は昨日、侵入者が入って来たじゃやう。その者に寝床を提供して欲しいのじや。」

「な、な、ちゅう……」

「切られてしまつたわい。」

「ではライ君、クラブハウスの方に住めるよつとしておくから今後はそこで生活してくれ。」

「はあ、わかりました。」

「つむ、ではそろそろ来る頃じやと想つたじやが……。」

「来る?」

「どうあえず君に、今田の学園の案内をしてもうひと頃つて呼んでもったのじや。」

前もつて紹介したかんと、ちょっと面倒になるかもしけん娘じや。

「良くてなんじやが、幾分、頭が固くてのん……。」

アーフアーフと学園長室にノックの音が響いた。

「どうだ？』

「失礼します。」

入ってきたのは、おそらくこの学園の制服であらう服を着て、長い得物袋を背負つた、黒髪を片サイドに束ねた少女だった。

side . 桜咲刹那

今日の朝、学園長から連絡が来た。

今日はお嬢様の護衛はいいから、9時に学園長室に来るよ、といつことだった。

そして私は学園長室にやってきた。

「ふふふ、よく来たの、刹那君。今日は君に紹介しておきたい人物がおつての。

彼、ライ君じや、まだ若いが、君のクラスの副担任を勤めてもらひうことになった。」

学園長が紹介した先には、高校生ほどの年齢で身長は一七〇cm代後半ほど、

黒いスーツを着た、細身、銀髪、碧眼の妙に気品のある綺麗な男の人が立っていた。

だが表情はなく、能面のような顔をしてくる。

「副担任……ですか？でも、彼は高校生くらいのよつに見えるのですか……。」

「ふむふむ、大丈夫じゃよ、彼はブリタニアの学校で、すでに大学を卒業しておる。

今は日本の教育状態も学びたいそつでの。」ついで採用することにしたのじゃよ。」

「はあ、それなら……わかりました。」

学園長がそつにのならうなのだらう。

「じゃがのう、彼はひらに来る途中。何かがあつたらしくての、

生活に必要な知識と名前以外の記憶を失つてしまつたよしなんじや。

」

「記憶……喪失、ですか……。」

「つむ、それで刹那君、今日は君に彼を案内をしてもらいたいのじや。」

生活に必要なものを買える場所やこの学園についてなどをな。」

私が案内?お嬢様の護衛を置いておこなうまで、なぜわざわざ私を?

「私が…ですか?」

「やうじや、やうじや。実は彼、誰かに追われていたみたいで、その上そひて自分の記憶がないことが、相当不安みたいでのう。自分が危険人物なんじやないかと。誰かに見張つていてもらつて、た方が気が楽みたいなんじや。」

100

そつこひ…… ことか。追われていたというのが気になるが。

なんとなく学園長の言わんとしていたことが理解できた気がする。

「やうこひとなら、わかりました。」

「頼むぞい。刹那君。他の者たちにも伝えてもらひえるとあつがたい。

」

他の者と言つのは、クラスの魔法関係者のことだらう。やはり私の予想は当たつていたようだ。

「では、ライ先生…ですよね。私は、麻帆良学園女子中等部1年の桜咲刹那です。」

よろしくお願ひします。」

「ああ、よろしく。」

「あのセイフと言えば、失礼ですけどフルネームは?」

「……ライ・シルヴァニアだ。だが、ライでいい。」

「わかりました。では、まず学園を案内しますので」ちりぐ。

そういう私はライ先生の案内を始めることにした。

side・近衛近右衛門

刹那君とライ君が出て行つた。

ふう、なんとか無事丸めこめられた。

ライ君が魔法関係者ではないかもしない以上、下手なことさせんな
んから。

後で詳しい説明をしておへとよひ。

そう言えればライ君も私が刹那君に言つたことは驚いていたよひ。
やつたが。

すぐにはうこいつとかと理解してこたよひもせつた。

彼、相当頭が切れるよひ。やつた。

「あの、学園長。」

「おおひー。なんじやタカミチ君ー。」

なんじや、びつくつした。

タカミチ君、そう言えばずっとここにいたのか。

話さんから忘れておつたわー。

「……何を驚いているんですか、学園長。」

「べ、べつに忘れてたわけじゃなーんじやからねー。」

「……忘れてたんですね。」

「む、じほん、で、なんじや？」

「いえ、彼の身体のこと少し気になることが

。」

ほう、おもしろい。

彼が魔法関係者なら、実際に欲しい人材じや。

実は魔法使いじゃつたりせんかの？……。

side・ライ

刹那からこの学園についていろいろな説明を聞きつつ、学園敷地内を歩いていた。

ここは相当なマンモス校だ。だが、僕の知識には入っていなかつたようだ。

「広いな、ここは。それに、まるで日本じゃないみたいだ。」

「そうですね。ここは生徒でも迷ってしまう人が、年に何人か出で
きますし。

それからここは初代学園長からの意向で西洋文化を多く取り入れて
いますから。」

「そうなのか？」

「ええ、そうみたいです。」

「ああ、それからこの後、買い物もしなければならないので、
さすがに今日全てを回るのは無理ですね。」

「今度この学園の地図をお渡ししますね。」

「それはありがたいな。ありがとう。」

「いえ、そんな。私も今年ここに来たばかりで慣れるのに苦労しま
したから。お互い様です。」

「たしかに……慣れるのには苦労しそうだな。」

「そういえば、その、背中に背負っているのって、刀か？」

「えっと、その、いえ。竹刀です。剣道部に所属してますので。」

「日曜日まで練習があるのか？大変だな。でも竹刀ってそんなに長いものだつたか？」

「う、え、いや、これは、その、練習用です……長いほうが、練習になるんです！」

「？……どうなのが。」

「それがです……！」

何故、そんなに必死なのかわからないが、まあ良いだらう。

そして僕らはたわいない話をしながら学園内を歩いて行つた。

「IJKは生協です。生活に必要なものは大体この生協で買えますが、今日は開いてません。

買い物は、市街に出ましようか。」

「うふ。よひしへ頼むよ。刹那。」

「はー。」

ところことで電車に乗って新宿に来ていた。

「人がいっぱいいるな。酔いそうだ。」

周りにはヒト入ひと。それに自分の髪色にも問題があつたか、相当目をひかれてしまう。

だが、気にしていても仕方がないので、気にしないことに決めた。

「ではまずは、服から買つていきましょうか。」

「ああ、そうだな。さすがにスーツ一着だけでは生活に支障が出るだろう。」

「スーツしか持つていらないんですか?」

「うん。そうみたいだ。最初に着ていた服はとても着れたものじゃないし。

それにしても、問題は、僕には今の流行というものが全く分からない。

センスというものに全く自信がないんだが……」

「それは……私も同じく……。」

「それは……私も同じく……。」

「まあ、適当でいいか。」

「う。すみません、力になれず……。」

と刹那は落ち込んでしまった。

「いや、いいさ。それに刹那は十分力になつてくれていいよ。

す」「助かってる。」

「やう……まつてもうえると……。」

そうして店に入るや否や、ショッピング店員に捕まつてしまい、あれよこれよと僕に似合ひそうな服を持ってくれた。

結果オーライとこいつやつか。

その後田畠品も買に学園に帰ることにした。

ライ先生を連れて新宿にやつてきて買い物を済ませた。

私は普段はたいてい学園内で用を済ませるので、お嬢様の護衛以外でこのようなところに来ることはない。

それにしても私の横を歩くこの人の目をひくことと言つたら、ものすごくかった。

ただでさえ目をひく銀髪に、この姿、すれ違う人全てが振り返っている。

主に女性の視線が熱い、気になるのは時折男性からも熱い視線が……

いや、さすがにそれは気のせいだらう。そう思つことにした。

それでもう日も暮れて学園に帰り、クラブハウスに案内した。

「いじがクラブハウスです。明日から、またよろしくお願ひしますね。

では、私はこれで。」

と、赤い髪紐をしたライ先生に呼び止められた。

「待ってくれ、刹那。今日は本当に助かった。

「ありがとうございます。それで、これはお礼と言つてはあれなんだが……。」

と私に袋を渡してきた。

「…………これは？」

「それは、やつを日用品を買つてこむとやけに見つけたんだ。

刹那に似合つかなと思つて……。

「そんな……いつの間に……。

あの、開けてみてもいいですか？」

「あ、ああ、構わない……けど、やつを言つたよつて自分のセンスには自信がないから

期待しないでくれるとありがたい。」

表情は豊かではなかつたが、それでも恥ずかしそうにしているライ先生を見て何故だか暖かい気持ちになつた。

中には赤い、髪紐が入つていた。シンプルだが、使いやすそうだ。

「ありがとうございますー。わたくし、つけてみますね。」

そして私は髪を束ねていた「ゴムをせじや、もうつた紐で再び髪を束ねた。

「あの……『う…』でしょ、つか？」

「あ、ああ、とてもよく似合つてこるー……と、思ひ」

少しだがライ先生は微笑んだよつた気がした。本当に少しだが。
「わ、そう、ですか、ありがとうございます… 大切に使わせていた
だきますね。」

思えば「うして異性からプレゼントをされるのは初めてだ。そう意
識すると急激に恥ずかしくなつて私は駆け出した。

「あ、あのっーでは私はこれでーー失礼しますーー！」

あ、待てもう暗いから送つていいくところライ先生の声に聞こえなか
つたふりをして

私はそのまま女子寮へと駆け込んだ。

お礼のつもりだったが、予想外に恥ずかしかった。

だけど、自分の見立ては合っていたようでほっとしていた。

それにしても刹那、足が速い。送っていくと叫んだときにはまずいぶ
ん遠くにいて聞こえなかつたようだ。

やつぱり追いかけるべきだつたかなと思つていて

突然高校生ほどの黒髪の男に声をかけられた。

「誰だ、おまえは？」などなにをしていい?」

男はじつと僕を睨みつけてくる。

「ああ、僕は今日からここに住むことになった

」

「ああ、お前がライか。俺はアッシュフォード高等学校1年のルルーシュ・ランペルージだ。

学園長から話は聞いている。じつちだ。ついてこい。」

そういう彼は僕を部屋の前まで案内した。

「隣は俺の部屋だ。何かあれば訪ねてきてくれても構わないが……

一緒に住んでいる俺の妹は足と耳が不自由でね、大きな音には敏感なんだ。だから、大きな音とかを立てないでほしいんだ。

」

妹思いの男らしい。

「ああ、もちろん。わかつたよ。」

「そうか、わかってくれて嬉しいよ。よろしくな、ライ。」

そう言って彼は表情を和らげた。

そして僕は部屋に入ると、予想外に疲れがたまっていたようで、何とかシャワーを浴びると

すぐに眠ってしまった。

翌朝、目が覚めてとりあえずスースに着替えるとタカミチさんがやつてきた。

女子中等部に案内してくれるらしい。

僕が担当するのはタカミチさんのクラスの1・Aだ。

タカミチさんから顔写真付きのクラス名簿をもらつて僕はざつと田を通した。

やはり女子中等部ということだけあって、やはり女子ばかりだ。

僕は何となく不安を覚えていた。

けど、刹那もいるみたいで、少し気持ちが楽になつていた。

校舎内は昨日までと打って変わって、非常に騒がしい。

女三人集まれば何とやらと言つが、数百人集まると、本当にもうとんでもないなと思う。

好奇の視線が痛い。

タカミチさんが立ち止まつたのにつられて、僕も立ち止まる。

「ここが君が受け持つ1-Aだよ。このクラスは本当になんていうか…個性にあふれているが、

みんない子たちばかりだから頑張ってくれ。」

「はい……。」

「じゃあここでちょっと待つていてくれ。」

僕が呼んだら入つてきて欲しい。」

そしてタカミチさんは教室内に入つて行つた。

声が聞こえる。

「今日からこのクラスに新しい副担任がつぶ」とこなつました。」

『え~~~~~聞いてな~~~~い~~~~』

す』元気な声が聞こえてきた。

「はは、そつだうね。初めて言つたからね。

では、さつそく紹介しようつと思ひます。

ライ先生！入つてきてください。」

中に入ると一斉に僕に30人ほどの視線が集まつてきた。

が、そこまで緊張することはなかつた。人前に立つことに慣れていたのだろうか？

それにして妙に視線を感じる。特にす』の廊下側一番後ろの金髪の娘だ。

目を見開いてこちらを見ている。

何故だろう？と不思議に思つて彼女を見ながら首を軽く傾げるとほつとしたように彼女は視線を逸らした。

なんだつたんだ？

「初めまして。今日からこのクラスの副担任を勤めることになった、ライ・シルヴァニアだ。

担当教科は英語の補佐だ。よろしくお願ひします。」

と僕は軽く頭を下げた。
昨日とつとこ出てきた偽名を使うように言
われていた。

か

「蚊？」

飛んでいるのか？

な、なんだ？耳が壊れるかと思つた。

「はいっ！ はいっ！ 彼女はいるんですか！？」

「どこから来たんですか！？」

「日本人！？」

「何歳ですか！？」

いろいろな質問が飛び交う。

ヘルプの意味を込めてタカミチさんや剎那を見ると、二人は困ったように笑っていた。

あ、剎那、僕があげたのつけていてくれたみたいだ。嬉しい。

「はいはい、みんな落ち着いて。

質問は一人ずつだよ。」

とタカミチさんは手を叩きながらみんなを静めた。

「じゃあ、はい！！」

パイナップルのような頭をした少女が手を挙げた。

たしかあの子は……

「朝倉さん？」

「おー！先生もつ覚えててくれてるんだ～。嬉しいねえ～。

じゃあ、とりあえず、私が代表として質問します！～。

先生随分若そうだけどおいくつですか?」

歳か……歳はいくつだろ？

昨日出会ったルルーシュくらいでいいか。

「16...かな?」

「んん？ 疑問形？ つてか若つーーえ？ ビリーリー」とーー？」

「ブリタニアで大学を卒業して、」から「研修に行く」となった
らしい。」

「へえ！ブリタニアの大学を！！すごい！！

でもなんでも、きからく問題形？

「いや、ちょっと、記憶喪失になつてしまつて…生活には支障がないんだが、ここに来る前のことを覚えていないんだ。

「でも学園長の意向でやめおぼしに勤める」と「なつたとしひねけだ。」

「ほうほう…ブリタニアからやってきた記憶喪失の天才美少年…
これはネタになるわ――――――!

じゃあ次！彼女はいるんですか！？

「記憶がないんで何とも言えないな。」

「あ、そか…ごめんごめん、じゃ、このクラスで好きなタイプは？」

この少女、妙になれなれしい、まあしかたないか。

「やうだな……。」

と僕はクラスを見渡すが、正直刹那以外知らないのだ。そして僕は迷うことなく答えた。

「桜咲刹那。」

କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର - - -

瞬間クラスが湧き上がった。

刹那は顔を真っ赤にして口をパクパクとしていた。

ああ、目立つのは恥ずかしいのか…申し訳ないことをしてしまった
など心の中で謝る。

後で謝つておこい。

「桜咲さんか――――――――！」

「せつちゃん……あんな顔するんや……。」

など様々な声が聞こえたが

「はいはい、セレモニーみんな席についてーー！」

「Rは終わりだよー授業の準備をしてーーー！」

とタカミチが再び場を静めた。

こつして、僕の学園生活が幕を開いた。

それにしても今日は金髪の少女……

エヴァンジョン・A・K・マクダウエルの視線をこの一日一日中感じていた。

彼女は一体何者だろうか……？

side・H・ヴァンジH・リン

昨日はじじいから妙な電話があった。

一昨日やつて来た侵入者の面倒を私が見うなどとほざいていた。

馬鹿じやないのか?何故私がそんなことをしなければならないのだ。

当然のじとく、私はそれを断つた。

のだが、また夜にじじいから電話がかかってきて、明日はその侵入者が副担任としてやつてくるから

明日はせがりずに来て、顔だけでも覚えておいてくれとのじとくだ。

まあこの14年間、サウザンママスターにかけられた呪いのせいど、何年も何年も中学生活を繰り返しているのだ。

どうせ向を置いても退屈なのだから、まあ見ておいてやるかくらいの気持ちで生返事をしておいた。

そして今私は教室にいる。

教室は昨日ものすゝい美形を見ただとか

しかもその美形がうちの制服の人と歩いていたとかそんな話で持ちきりだった。

ああ、くだらない。この年代の女子たちははじつは色恋沙汰には田がないらしい。

色恋か……とふと昔を思い出す。

400年前から、私の世界には色とこつものは無くなってしまったのだ。

そう、400年前のあの口から、もつ何も感じない。

400年前ライは死んだ。

幸せになれと私に言い残して。

ふざけるなよ。お前がいなここの世界で、どうやって幸せになれるところなんだ。

新しい出会い? そんなもの知るか。

それに、400年前のあの事件で、私の存在はますます危険視されてしまったのだ。

そんな私を、一体誰が受け入れると？

あの日から私は生きる気力を無くしてしまっていた。

そしてサウザンドマスターはそんな私に出会い、

「案外楽しいこともあるかもしないぜ？」

と頼んでもいないのにふざけた呪いをかけて行つた。そしてやつはそのまま帰つてこない。

死ぬんだつたら」のふざけた呪いを解いてから死ねばいいものを…

…。

ああ、じつにくだらない。

「ライ先生！入ってきてください」

ピクリと私は反応をしてしまつた。

ライ…大嘘吐きの男の名前。私を置いて一人で去つて行つた男の名。

まさかそんな名前の奴が来るとは思わなかつた。

ああ、不愉快だ、やはり今日もたまるとこや。

騒ぎに乘じて教室から出ようと席を立とどいたその瞬間

一人の男が教室に入つて來た。

私は動けなくなつてしまつた。

ヒュッと肺に空氣が流れ込み呼吸さえも止まつてしまつたよつた氣がする。

男から視線が逸らせず、

動くことも、声を出すことも出来なかつた。

似てゐるのだ。さつきまで考えていたあの男に。

ライに

似ているなどと云つようなものではない。

銀髪、碧眼、あの顔、立ち居振る舞い。

瓜二つ。まさに本人その物なのだ。

しかも400年前の姿そのままだ。

強いて違つと云ひを挙げるとするならば、無表情、そして髪が少し短くなつてゐるところだらうか。

王としてのフレッシュヤーといつか、威圧感も無くなつてゐるようと思ひ。

だが、あり得ない。ライはあのとき死んだはずだ。

だがあの姿。ライより無表情だが、やはりライだ。

なんなんだ？ どうしたことだ！？

じつとライに似た男を見ていると、奴は私の視線に気づいたのかこちらを見てきた。

そして、不思議そうに小首をかしげたのだ。

私は慌てて奴から目を逸らす。

いやいや、落ち着け、私！－ライが生きているはずはない。

あのとき死んだじゃないか。

それにあのライがあんな風に首をかしげてこちらを見るわけがない！

何なんだあれは！？ギャップ萌えで私を殺す気なのか！？

いやいやいやいや！落ち着け、いかんいかん、日本の文化に毒され
てきたようだ。

それはもういい、だが、あれがライであるはずがない！

あの時生きていたのか？いや、生きていたとしても400年も人間
が生きているはずがない！

ライであるわけがないのだ！－

「初めてまして。今日からこのクラスの副担任を勤めることになった、
ライ・シルヴァニアだ。」

「ライの声が響いた！忘れるわけがない。この声。

ライの声だ……。

なんなんだ！？

なんなんだこれは！？

何者かの私への精神攻撃か！？

そうだとしたらなんて……

なんて見事な……

この真祖の吸血鬼である私の、唯一の弱点を、なんとの的確に……！

わからないことだらけだがクラスの奴らが聞き出した情報は

記憶喪失。

歳は16歳。

記憶がないのなら違う可能性もある。ライは17歳だったな。

ブリタニアからやって来た。

ライならあり得るが、記憶がないのであればあてにはなるまい。

彼女はなし。それも記憶がないのならわかるはずはない。

好きなタイプ、桜咲刹那

とのことだった。

最後のには少しばかり動搖してしまった。

いくら違うとは思っていても、ライの姿をしているだけでこつも動搖してしまうとさ。

先ほどまで色恋などくだらないと笑っていた自分を嘲った。

あの一人は知り合いか？

後で刹那を問い合わせてやろう。

そうだ、私は今動搖している。

400年間重く、動くことのなかつたこの心が、こうも簡単に。

動き、揺れているのだ。

敵の策略だろうとなんだろうと、私は今、この状況に心が動いてい

る。

奴の正体を必ず突き止めてやる。

もしかしたら、本当の、本当に、ライなのかもしない。

だが、もし悪意ある者の仕業ならば、私の心を乱した報い、受け
もうう。

手つ取り早い方法が一つある。

最後にはその手を使つとしよう。

まったく、あの人は…何を考えているんだろう。

あんなとんでもない」とを平然と言つなんて…

おかげで1日大変だったのだ。

side . 桜咲刹那

クラスメイトに知り合いなのかと問い合わせられ、逃げるために休み時間毎に即教室を出て時間を潰していた。

そして今、部活へ行くため帰り支度をしていると、それを言つた超本人に声をかけられた。

「刹那。朝はすまなかつた。君の気持ちを考えず、勝手なことを言つてしまつた。」

「今何と言つた！？私の気持ち！？ビックリしたことだ！？まさか、朝のあれば本気だつたとでも言うのか！？」

「あかん！…あかんよ…」つむぎのちゃんがつ…！

「君が人に注目されることが苦手だったとは、考えが足りなかつた。本当に申し訳ないことをしてしまつた……。」

「うえ？あ、ああ、そういうことですか。大丈夫です。」

「危ない危ない。勘違いしてしまつところだった。恥ずかしい……。

「そつか？なら、いいんだが……。」

「はい、気にしないでください。」

「ああ、そう言つてもうかると助かるよ。

じゃあ、僕はこれで……。」

トライ先生は教室を正面と背を向けたのだが、突然振り返り
「ああ、そうだ、それ、使ってくれてるんだな。ありがとう、嬉
いよ。

やっぱり、似合つて思つた。

そつと去つて行つた。

だから、何なんだ、あの人は……。こういふことを恥ずかしげもなく
さらりと言つてのける……。

しかもいちいち気品があるといふか……。

私はしばらく呆然とトライ先生が出て行つた扉を見ていた。

「おい、刹那。ちょっと聞きたいことがある。」

突如、魔力が私の周りを覆つ。認識阻害の魔法らしい。

「ヒュア ンジエリンさん……。なんですか？」

声をかけてきたのはエヴァンジエリンさんだつた。めつたに話しかけてくることのない彼女に話しかかれ

私は内心驚いていた。

いつもどこか遠くを見ていたり、そもそも、教室にいることが少ない。

彼女は今はとてもそうは見えないが、真祖の吸血鬼で、今はサウザンドマスターに呪いをかけられ、延々と中学生生活を繰り返しているらしい。

呪いをかけられる前は、闇の福音だとか、悪しき音信だとか、童姿の闇の魔王だとか、不死の魔法使いだとかなんともはずく……

禍々しい通り名がついている吸血鬼だったそうだ。

なんでも魔法関係者には、日本におけるなまはげ的な扱いらしい。

しかも元賞金1000万ドルと言つ賞金首だつた。なんでも一国を一夜で滅ぼしたとの伝説があるらしい。眞偽のほどはわからないが……。

そんなエヴァンジエリンさんが私に一体何の用なのか？

「貴様、今日やつて来たあの副担任とは知り合いか？」

ライ先生のことか。一体どうしたのだろう。

「いえ、知り合いといつか、昨日学園長に頼まれて、彼の日用品を
買いに行つたり、この学園の案内をしたんです。

それでちょっと話して仲良くなつたといつか……なんていつんでしょ
う?」

でも、それがどうかしたんですか?」

「いや、ちょっと気になることがあつてな……。

それであつてお前の知つていることを話してもいいわ。」

「あれ? ハヴァンジーリンさんのことだから、てつあつも「学園長
から話が行つているものと思つてました。」

そして私は昨日の晩、学園長から聞いたライ先生についての詳しい
情報を伝えた。

記憶喪失のこと、

名前のこと、

追われていたこと、

「……つか……いや、だが、もしかすると……可能性は……。」

ハヴァンジーリンさんは何やら呟いていたが聞こえない。

そしてエヴァンジエリンさんは礼を言つて教室から出て行った。

何だったんだろうか？

side・エヴァンジエリン

刹那の話を聞いてみたものの、やはり確信めいた情報は得られなかつた。

やはりこれはあの手を使つしかなさうだ。

昇降口を出ると私を悩ませる種がそこにはいた。

シルヴァニアだ。

ちゅうじこー、始めるとするか。

「やあ、シルヴニア先生。貴様と話がしたいんだが、ここではあれだ、ついて来い。」

「……君は僕のクラスのエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルか。

ああ、構わないよ。僕も君と話してみたいと思つていたんだ。

でも、どこへ?」

「私の家だ。」

そして私は歩きだした。

授業も終わり、これから学園を回つてみようかと思つてゐると、

うちのクラスのエヴァンジョンに声をかけられた。

「いふんと高圧的だつたが、別にそこまで不快ではなかつた。妙に
こういう態度が様になつてゐる子だ。」

僕としても氣になつてゐたので、断る理由もなくついていくことに
した。

しばらく歩いてみると、学園の外れにログハウスが見えてきた。

「君は、あんなとこで一人で住んでいるのか？」

「いや、一人同居人がいる。」

「やうか、でもどうしてあんなとこで？」

「答える義務はない。貴様もクラブハウスに住んでいるんだらう？」

僕がクラブハウスに住んでいるのは、男子寮が一杯だつたのと、女
子寮を断つたからと、ログハウスの宿主に断られたからだつたな。

まあ、なにか事情があるのだろう。

「ん？ ログハウス？」

「もしかして、学園長が言つていたログハウスの宿主というのは君

のことが？」

「ん？ ああ、 そ うなんじや ないか？

そ うい え ば 昨 日 じ じ い から お 前 を 世 話 し し と か い う 電 話 が か か つ て
き た な。」

や は り 宿 主 と こ う の は こ の こ ら し い。 ま さ か 女 性 の 家 だ と は 思 わ な
か つ た。

あ の 老 人 …… そ こ ま で し て 僕 を 女 の 子 と 暮 し て 欲 し か つ た の か ？ 意
味 が わ か ら な い。

「 着 い た ぞ。 入 れ。」

中 に は た く さ ん の 人 形 が 飾 つ て あ つ た。 ファンシ ー と も グロテスク
と も 取 れ る、 そ な な 部 屋 だ。

居 り 場 も な く 立 ち す く ん で い る と、 座 れ と 声 が か か る。

僕 は 近 く の 椅 子 に 腰 を 落 と し た。

「 単 刀 直 入 に 聞 く。 シル ヴア ニア、 貴 様、 何 者 だ？ 何 故 この 学 園 に
や つ て 来 た ？」

「 そ れ に つ い て は 答 え ら れ な い な。」

「なんだと？」

エヴァンジョンの眉がピクリと動く。

「わからないんだ。どうしてここにいるのか。

僕が何者なのかも。どこから来たのかも。何も思い出せないんだ。

だけどどういうわけか、知識だけはある。氣味が悪いほどにだ。」

「……そつか。」

「それから、ライで言つ。シルヴァニアと言つのはどうでも慣れな
い。」

「……断る。私がその名を呼ぶのは一人だけだ。」

「ライと言つ知り合いがいるのか？」

「答える義理はない。」

「……そうか、なら仕方ないな。」

ガチャリ、とドアが開いた。

『ただいま帰りました、マスター。』

お客様ですか?』

「ああ、おかえり。」

エヴァンジエリンが言っていた同居人だ。長い緑の髪で、耳に妙なアクセサリー?をつけている。

彼女は僕のクラスの絡繰茶々丸か……。

『こんばんは、シルヴァニア先生。1-Aの絡繰茶々丸です。よろしくお願ひします。』

「ああ、よろしく、茶々丸。

僕のことばライでいい。』

『了解しました。ライ先生。』

「茶々丸!シルヴァニア先生に飛びきり落ち着く紅茶を出してやれ!」

『…了解しました、マスター。』

いいか、どびきりだぞ。と念押ししている。

「茶々丸の煎れるお茶は最高だぞ。」

とエヴァンジエリンは血謹びに言へ。

「 さうか、 それは楽しみだ。 」

「 お待たせいたしました。 どうぞ。 」

そして紅茶が渡される。 いい香りだ。

いただきます、 と一口紅茶を飲んだ

その瞬間、 強烈な眠気が僕を襲う。

なんだ！？ これは！？ 身体が重い、 動けない。

最後に僕が見たのは、 僕に近づいてくるエヴァンジエリンの姿だつた。

誰かが泣いている。 誰だ？ 泣かないでくれ。

この声を聞いていると何故だかとても苦しくなる。

目を覚ますとそこには僕の腕の中で泣きじゃくるヒガアンジエリンの姿があった。

茶々丸は慌てたようにおひおひしている。

エヴァンジエリンは何を言っているんだろう。

「へ… ウアンジヒン… ミハシト泣いてるんだ？」

エヴァンジエリンは僕の声驚いたのか、びくりと顔をあげた。

「ハライ……お前……もう少しあがんでる……?」

卷之三

それよりも、エヴァンジエリン、僕に一体何をした？それに、どうして泣いている？

「つ馬鹿者め！泣いてなどおらぬわー！私が泣くわけがないだろつ

「花粉症……にしてはひどくないか？」

「……」

「花粉症……にしてはひどくないか？」

「今まで普通だったと思うんだが。

「じゃあ質問を変えよ。どうして僕にしがみつこうる？それと、僕に何が盛つただろう？」

「う、これはうそのう、うがつ……」

慌てたように僕から離れようとするエヴァンジョン。しかし僕は逃げようとする彼女の腕を掴んだ。

しかし彼女も抵抗する。

「のままでは埒があかない、仕方ない、あの力を使つか……。

「ライが命じる、僕の質問に答える。僕に一体なにをした？」

しかし、僕の声に続いたのは沈黙だけだった。

おかしい、まさかこの力を失ってしまったのか！？

焦つてこると、エヴァンジエリンが口を開く。

「今……ギアスだな？」

「つー？ 何故知っている！？」

何故だ！？ 何故彼女がギアスのことを知っている！？

「……ああ、やはりお前はライだよ。間違いない。」

確信したと彼女は言つ。

「？……どうして？」とだ。

「そうだな、なんと答えたらいいか……

私は昔のお前を知つていて。

昔の僕だとー？ 記憶を失つ前の僕を知つていてるということか！？

「今お前は私にギアスを使つただろ？ だが、何も起こらなかつた。昔一度私にそれをかけたことがあるからだ。

それでは証拠にならないか?」

……たしかにギアスを発動したはずなのにからなかつた。僕は一度彼女にギアスをかけたことがある?

そりこりことなのか?

……

「それから、悪いがわつきはお前を眠らせていろ間に、お前の血を

調べさせてもらつた。何か薬みたいな物も混じつていたが、間違いなく、ブリタニア王族と、日本の皇族の血が混じつていた。

これは、ライ以外にありえない。

思い出せないか?ライ?

ブリタニアの王族と、日本の皇族の血が混ざつているだと?僕の血が?

ますますわからない。僕は一体何者なんだ?思い出せないと、やはり頭に霧がかかつたかのように思いで出せない。

「わから…ない…。思い…出せない。」

そういうとHUGAンジHリンは悲しげな顔をした。ああ、そんな顔をするな。

なぜだらう、すいへ、辛くなる。

「……そうか。

だが、断言する。お前は間違いなく私の知るライだ！

ブリタニアの元王、ライラル・フォン・ブリタニアだ！

覚えておけ。」

……王だと？僕が？

どういふことだ！？

痛いっ！頭が割れそうに痛い！…なんだ？思い出そうとするといつ頭
が！！

「つおいー・ライ！大丈夫か！？」

エヴァンジエリンが心配そうに僕を見る。

「つああ、大丈夫だ。そんな顔をするな。

すまないな、思い出せなくて……。」

「いいや、いつかきっと思いつく。それに、思い出せなくてもライ

はライだ。

ライだとこいつこと変わってはない。」

ハガタ・ンジ・ロンはハガタ・ンジ・ロンだらう。

つなんだ? 今のは……?

「どうした? ライ。」

「……不思議だな、どういっわけかそれに似たような言葉を君に囁つたことがあるよつな気がする。」

「……ふふ、そうか……。そんなこともあつたかもしれないな。」

とエヴァ・ンジ・ロンは囁く。

「やうだ、一度田になるが、私の正体をお前に伝えておこい。」

私はな

「

僕はビビり一度田となるじてその言葉に衝撃を受けた。

だが、何故だかすんなりと受け止めることができたのだった。

まるで、それを知っていたかのように。

それにして、まさか、エヴァが…エヴァンジョンジョンにそう呼べと言われた。

…血を調べたところのは、そういうことなのか？

まあ、納得と言えば納得か。血液検査の結果を出すとしては、いくらなんでも早すぎるからな。

そしてエヴァは最後に僕にとって最も衝撃的な事実を言ったのだ。

僕が400年前の人間だと。

僕の過去を知るものに出会えて安心していたが、どうやらまだまだ謎だらけらしい。

エヴァのためにも、自分のためにも、早く思い出さなくてはと心に決めた。

銀王と麻帆良10月2日? (後書き)

これで……なんとか移せた……かな?
サーバーがパンクする等考へてもいませんでした。

短編ユニーク4000人超えてました、ありがとうございます。あ、
もちろん全話合わせてです。

嬉しいですねえ、こんなに見てくださっている方がいて。
ネギま人気かロスカラ人気か……すごいなあ……。

ご感想くださった方、

ご感想に返信できないまま短編の方消してしまったので、申し訳な
いです……。

「」感想、アドバイス等ありましたらぜひよろしくお願いします。

銀王と魔晄炉～OVA～（前編）

sieの方へやめてみました。今回短いです。

エヴァンジェリンに僕の過去を聞き、クラブハウスの自室に戻つて来た。

あれからまだ夜は明けておらず、まだ夜明け前の朝の3時だまさか一日にして記憶の手がかりを得ることになるとは思わなかつた。

だけど正直なところ実感はわかれない。

もちろんエヴァの話を信じていらない訳ではない。
ないのだが、やはり自分が400年前の人間、そのうえ王だつたと突然言わても戸惑つてしまふのは仕方の無いことではないだろうか?

自分の過去を考えれば考えるほどに、頭の中に霧がかかつたかのように何も思い出せない。

そんな悶々とした夜の中、眠れるはずもなく、ただ霧がかかつた思考とともにクラブハウスの一室で一夜明けるのを待つている。

明日、いや今日も仕事があるのだが、幸いにも、皮肉にもと云うべきかエヴァンジェリンの家で眠つていたためおそらく仕事に差し支えはないだろう。

まだ4時か…。このまま部屋にいても眠れないし、いっそ散歩にでるのも気が晴れていいかもしない。

そして僕はクラブハウスを後にした。

「あれ？シルヴァニア先生？」

おはようございます

と、辺りを適当にぶらついていると突然誰かから声をかけられた。

「おはよう。びっくりした。まさかこんな時間に声をかけられると
は思わなかつた」

「あはは。私もこんな時間に知つてゐる人に会つとは思ひませんでし
た」

「君は、たしかうちのクラスの神楽坂明日菜…さんだつたかな」

「わ、すうじですねー。もつ顔と名前覚えてるんですか?」

「いいや。まだまだよ。今は自分のことよくわからないから、
せめて周りのことはわかるよつとしておうつかなつて。」

「…あ、そつか。記憶喪失…って言つてましたね。」

「うん。困つたことに。ここに来る前のこと全然覚えてないんだ。
不思議なことに、生活に必要なこととか勉強とかは無駄に頭に入つ

てるんだけどな。」

本当に不思議だ。怖いくらいだ。

「…………ちょっと、私と似ていますね。」

明日菜が小さく呟いた。

「似てる?」

「あ、いえ、その……私も……この学園に来る前のことが、覚えてなく
て」

学園長のお世話をなつてゐるようなものなんです。ヒアスナは言ひ。

「せつ、なのか。……やっぱり昔のことを思い出したいって?」

「うーん。思い出したいって言えば思い出したいけど。でも、別にいいかなとも思うんですね。昔のことばっかり気にするのは、今私によくしてくれてる人達に失礼かなって思つんですね」

「……そう、か。これから記憶探しをしようと思込んでいた身としては、身に余る言葉だ……僕も身の振り方をよく考えないといけないな」

「あーすみませんーそんなつもつじゃ……昔の自分を知りたいのなんて当たり前のことだと思いますよー！
それにほら、私はどちらかと言つと諦めの境地つて言つか、考えるのめんどうさくなつたっていうか……」

明日菜がしまつたとばかりに必死にフォローしてくる。

「そんなに必死にならなくても大丈夫だ。気にしてない」

「あ、その…すみませんでしたーー」

「いいよ」

「でも…」

「気にしないでいい。… そうだな、そんなに気にするなら今度道案内がてら学園の散歩にでも付き合ってくれ。まだ学園内を把握していないし、何か思いだすこととかあるかもしれない。これでおあいこつてことどうだ?」

「あ、はーーーもちろん構いませんよー。」

「あつがとう。よろしく頼む。神楽坂さん」

「あ、なんか神楽坂さんって違和感あるつていうかむずかしいので
アスナでいいですよ」

「せうか? ジャあアスナ、僕のこともライブで構わない。シルヴァニア
アは正直しつづこないというか、むずかしい」

ひとつに作った偽名だからとま言わないが。

「あはは、なんですかそれ。わかりました、ライ先生。これからよろしくお願ひします」

「いらっしゃい。

ああ、とにかくアスナ。そういうばこんな時間から何をしているんだ？」

「え？ あ、いけない！ バイトです！！ 新聞配達のバイト…！ 学園長にお世話になりっぱなしなのは嫌なんで、ちょっとでも学費とか返したくて…！ ライ先生！ 私、遅刻しそうなので失礼します…！」

そう言いアスナは凄い勢いでダッシュした。凄い速さだ。

それでも学費を返す…か。まだ12歳のはずなのにえらいな。そんなアスナを僕は応援せずにはいられなかつた。

「アスナ…！」

「つはい…？」

「頑張つて」

「つっはいーー！」

そしてアスナは走り去つて行つた。

記憶喪失仲間、というのはおかしいが、自分と似たような状況におちいつている人と話すとなんとなく安心というか、大丈夫な気がしてくるから不思議だ。

アスナと話をしたことで、数時間前まで一人で悶々と考えていたことが少し軽くなつたような気がする。

この散歩はいい気分転換になつたようだ。

そろそろ学校へ行く準備をすることしよう。

僕は一応補佐のはずなのだが、何故か今日は英語の授業を受け持つことになっている。

自信はないが、できることから精一杯やつていこう。

そして僕は一度クラブハウスに戻り、シャワーを浴びて学校へ行く支度を始めた。

『 きりーつー礼、着席』

お願いします

と教室に声が響いた。人前に立つことに苦手意識はないが、上手く授業を進められるか正直緊張する。

そして何より一部視線が熱い。

気付かない方が無理なんじやないかと言つほどに熱い視線を感じる。

左奥窓際に座る少女、エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルだ。

昨日のこともあって、正直僕はどうしたらいかわからないでいる。

彼女は僕が知らない僕を知っているのだ。それが今の僕には怖くもある。その事実がいまいちピンとこず、まだ受け入れるには時間が必要だと言つのが僕の結論だ。

いきなり答えを突き付けられても、過程がわからなければ理解など

出来ない数学のよつに、今はまだ段階を踏まなければならないことを
なのだと思つ。

答えを先に知つてゐることが近道になるのか、裏目に出るかはわから
ないがちょっとずつ解いていかなければならぬ問題だろ。

そして、今をしあたひのやるべし」とせしの授業だ。

誰かを並べよつとすると面白くへりて顔を背ける者がいる。

特に激しいのは今日の朝知り合つた少女

「はいじゃあアスナ。15ページのマスクとH/Iの会話和訳してみ
る。」

「ちゅーらい先生ひじりー。

と言いつつアスナは渋々教科書を読み始める。

「えーっと、

『ハイ！マイク！あなたは…エウロペ…から来ましたか？』

『いいえ。エミ。私は…エウロペから…来ていません。私の…羽はエウロペから…来ました？』何これ意味わかんない。』

「…はい、もういいぞ。そうだな…全く理解していないうことは無いと思つんだが、とりあえず単語を覚えてみると今より英語がわかるようになるとと思つ。

今のは単語以外は間違えていなかつたしな。まあ『来ましたか』じゃなくて『出身ですか』の方がよかつたかなとは思うけど、エウロペって言つてたのはヨーロッパ。羽はむしろよくそつちが出てきたなと誉めたい位だ。フェザージやなくてファザーな。次、頑張つて

「うう…はーい…」

「アスナ英語苦手やからなあ」

黒髪の少女がアスナを励ます。確か近衛このかだつたな。

「あーり、苦手なのは英語だけじゃないのではなくて?」

金髪の少女がそれを茶化す。

雪広あやか…だつたな。

それを聞いたアスナは雪広につかみかかる。

「何をーー!？」のシヨタロン委員長ーー。」

「いのちーですわー!」のオジロンバカ猿怪力女ーー。」

ショタロンとかオジロンってなんだろ?と思いつつ、ケンカを止
めに入る。

「いら、二人とも落ち着け授業中だぞ。雪広ー今はお前が悪い、
頑張ってる人を馬鹿にするのは良くない。アスナに謝るんだ。」

「う、…はー、その……言い過ぎましたわ。」、「めんなさい」

「え、あ、いやいいわよ。悔しいけど…馬鹿なのはホントだし…」

「はい、二人ともいい子だな。じゃあ席に着こうか。」

一人の頭をポンポンと叩くように撫で、席に着くよう促した。

二人とも大人しく席に着いてくれた、ところでチャイムが鳴る。

「ん、終わりだな。日直ー」

『きつーつ、礼、着席』

ありがとうございました

の声が響き、なんとか授業を終えることができた。

「あ、そうだ、アスナ。さつき悔しいって言つてたな。今度放課後、
補講でもやってみるか?」

「え、？あ、あはは…いえー部活があるので…補講はちょっと
…」

「やつか…。もひとつ君と話す機会を増やしてみたかったんだが。残
念だな。」

記憶喪失仲間として色々参考になることもあるかと思つたが残念だ。

「え？え？そ、それってどういっ？」

突然アスナが狼狽え始めた。どうかしたんだろうか？

『あーーー！ライ先生がアスナ口説いてるーーー』

一人の生徒が大声で叫んだ。

口説く？

僕がいつアスナを口説いたと言つんだろう。

瞬間、教室中が大暴れを始めたようだった。

アスナは「私には高畠先生がーー！」と謎の言葉を残して教室から飛び出し、

生徒達はそう言えばアスナだけ呼び捨てだったねなどと言つ質問攻めをしてきたり

誰かは机か椅子を倒してしまってたり、それはもう色々と大変だった。

昨日今日の疲れが一気に来たような気がする。

でも充実しているとも感じる。

今は空っぽな記憶だが、こつかじんな記憶で埋まればここ少し
思った。

まだまだ副担任兼記憶探しの生活は、これからどうなるかわからな
いこととだけだ。

まずは手探りに少しずつせりてこくのへこにせじょなこかとゆづ。

なんとなく第4話です。

半年ぶりです。待っていてくださった方おりましたら嬉しい反面、大変申し訳ないです。

半年経つてしまったら、小説方向性も変わってしまうことを実感しました。最初考えていたのと全く違います…おかしいなあ。

感想、評価等ありましたら是非よろしくお願いします。

銀王と麻帆良 10月2日?

さて、授業も終わり教室での騒動をなんとか抜け出すことにできた。僕は、とうあえず学校を出ることにした。

それにしておわづきはほんとうに大変だった。

アスナが教室を飛び出していったあと

「なんで名前呼びーー?」

「いつ知り合ったのーー?」

「まさか先生アスナのこと狙ってるのーー?」 etc .

様々な質問が飛びかかってきたのだ。

それにひとつひとつ丁寧に答えていると突然

ズドンっ

と重たい音が教室に響いた。

何事かと音がしたほうを皆が一斉に見るとそこには、何故か壊れた机と、こちらの方に身体を向け、ただならぬ雰囲気でうつむいているエヴァンジョンジエリンがいた。

「うわー・エヴァちゃん！？机どうしたの！？」

と、たしか椎名桜子といったか、桜子が心配そうに聞いた。

エヴァンジョンジエリンはそれを無視し、近づいてきたのだ。その様子に擬音をつけるとするならばゆらりとこうのが正しいだらうか？

静かに、ゆうべつ、しかし確實にこれから近づいてくるエヴァンジエリンは恐怖を感じさせるものだった。

そしてエヴァンジエリンはゆうゆいたまま僕に声をかけてきた。

「……なあ、ライ先生？ 周りが偉く騒いでいるようだが、要するに、今日の朝、散歩しているときに、バイトへ向かう神楽坂明日菜と遭遇し、世間話をして……少し、仲良くなつただけ、ところがことだな？」

「あ、ああ。 そうだが」

エヴァンジエリンのただならぬ気配に思わず冷や汗が出てしまつ。

僕の近くにいた生徒はエヴァンジエリンのただならぬ気配を察知し少しでもエヴァンジエリンから逃れるかのように僕の背中に逃げ込んだ。他の生徒も糸が張り詰めたかのような空気にただ身をすくませている。

「……断じて、神楽坂明日菜を狙っているというわけではないんだな？」

「だから、狙うという意味がよくわからないんだが…。まだ知りあつてから数時間しか立っていない上に、アスナは生徒だぞ？」

「ふ、ふふ、そうか、そうだよな。ただの生徒だよな。それにまだ出会つて数時間…私の方が…

つて…！おい貴様ら…いつまでライにまとわりついてこるつもりだ！事情がわかつたのだからとつとと散らんか…！」

なにか納得したかと思つとエヴァンジエリンは顔を上げ僕の周りにいた生徒たちを追い払つた。

その勢いに飲まれた生徒たちは渋々といつよつに僕の周りから離れていた。

正直助かつた、がしかし

「エヴァンジロン？何を怒っているのかわからないが、皆が怯え
るような行動はよくないと思つ」

そんなに高圧的だと友人をなくしてしまつのではないか。

そんなエヴァンジロンの今後が少し心配になり、注意しておくこ
とにした。

「なつ！あれはライガ……」

「僕？僕が何かしてしまつたか？それなら謝るが……でももさつきみた
いのはもうしないよつて気をつけてくれ」

「うひ、こやーでも……つべ、わかった……氣をつける……」

「ん、いい子だな」

先ほどアスナ達にしたよつてぽんぽんとエヴァンジロンの頭を撫
でた。

「……ライ、お前は本当に昔からこう……無自覚だから困る」

自覚？

「何の話だ？」

「…いや、なんでもない。とにかくこれからどうするんだ？」

よかつたらお茶でも、という彼女の誘いをあいにく職員会議があるのでと断つた。

職員会議がなくとも彼女の誘いを断つていただけと想つ。やはり今は彼女との距離がつかめない。

どうしたらいいかわからないのだ。ライはライだと彼女は言つてくれた。それは今の僕にはとても心強くもあり、同時に不安にさせる言葉でもある。

僕は今自分自身が一番わからないのだ。信じられないのだ。そんな自分を信頼している彼女に申し訳がないというべきか、立つ瀬ないというべきか。

とにかくにも顔を合わせづらうとこうとは間違いない。時間が

必要だ。

そして今僕は職員会議を終え、学園内を歩いて見回りとしたのだ。

下足箱を少し出した所で先程教室を飛び出したアスナを見つけた。向こうから近寄ってきたのでアスナは近寄らなかった。

「あ、あはは、その、ライ先生、わたくしの急いで飛び出しちゃってすみません」

「いや、構わないが、急に走って飛び出しから驚いたよ。どうして急に飛び出したんだ？」

「えー? それは……その……ちょっと急用があったもので」

あははははとアスナは困ったように笑った。

「やうだつたのか…なら、仕方ない…のか？」

少し腑に落ちないとひるもあつたが詮索はやめておく。

「あの後、大変だつたらしいですね。なんでもエガツちゃんが暴走したとか…」

「ああ、たしかに、暴走とこつとのとせちよつと違つよつたな気がするが、アスナが出ていつた後大変だつたのは本当だな。」

なぜだかクラスの子達に囲まれて本当にびじょつかと思つたよ

とアスナに言つとアスナはまた困つたように笑つ。

「それで、ライ先生はもう帰りますか？」

とアスナが尋ねてきた。

「いや、これからまたちょっと散歩でもしてみようかと。まだまだわからぬことだらけだからな。記憶だけじゃなくて、この学園のことも」

「あ、じゃあ私付き合いましょう」

「え？ でも、いいのか？」

「なーに言つてるんですか。先生が朝言つたんじゃなこですか」

「それはもうだが……」

願つてもない申し出に少々戸惑つてしまつた。

「うん、じゃあよひしへ頼む」

「頼まれましたー」

とアスナは笑いながら軽い敬礼をしてみせた。

「やつぱり…広いな」
「

「ですよね。もう一つの街ですもんね」
れ

「建物も西洋文化って感じだし、正直自分がどう感じるのかわからなくなってしまうな」

「ライ先生はブリタニアから来たんですね？」
「こうこう建物をみて
懐かしいとか感じたりは…？」

「こうこう建物の様式が懐かしい？どうだらう？知識として西洋文化
だと分かる程度で、懐かしいとか言つ感情は湧いてこない。」

「しないな。全く知らない風景だとしか感じない。」

「そうですか…やつぱりやう簡単に思い出したりするようなものじ
やないですよね…」

「ありがと。氣にしてくれて。でもアスナが氣に病む必要はない。
いつもやつて付き合ってくれるだけでもすいぶん気が晴れるし助かっ

「てゐ

「そ、そりですか？そりゃもひらべると……嬉しい、です。」

「あ、そりだ。どこが行きたこと」とかありますか？とアスナが聞いてきた。

「そりだな、右も左もわからないから特に目的はないが、一番気になつてこるのはあれだな。」

と、ぼくはそれを指さす。

「あれ、ですか……やつぱあれ、氣になつてやつまわね」

「うん。あれはなんといつても存在感がある」

「あ、あのもあそこいつと距離あるんで、あそこに行くまでこいつひとつそのへんつまわせん？」

「ん？ああ、もちろん構わない」

「 もうこえぱ、ヒュアちゃんとは知り合いなんですか？」

目的地に行くまでの道中、色々と寄り道をしながら話をしていくと
アスナがそう尋ねてきた。

「 ああ……そう……みたいだ。」

「みたい…ですか。」

「ああ、僕は覚えていなくて、彼女の話を聞いても全然思い出せないし、むしろ混乱したと言うか、正直どう接したらいいのかわからぬ」

「そう…ですか。昔のことを探しても思い出せないとなると気がまずいでしょ?」

「それに、何より自分が信じられなくて。例えば昔の自分が超極悪人だったかも知れないと考へると、今ここにいていいんだろうかって思?」

王だったとは聞いたが、自分がどんな王だったのかなど、エヴァはなぜか教えてくれなかつた。悪い予感も頭によぎる。

うーん、とアスナは何かを考えている。

「でも私は今のライ先生は良い人だなつて思いますよ。まだ知りあつて1日も経つてないんですけど…悪い人だったとは思えません。いいんじやないですか?大事なのはこれからじやないですか!!昔どんな人間だったか悩むよりも今を楽しんだほうが絶対いいですよ!!そのついでに昔のこと思い出せたら一石二鳥だし!!」

うへん… 我ながら軽い考え方ですかね…

トアスナは首をひねる。

「いいや。参考になつたよありがと」

「もしもライ先生が極悪人だつたら私が一発ぶん殴つて目を覚まさせてあげます！」

「それは…頼もしいな。でももし僕が本当に危ないやつだつたら逃げてくれよ」

「あはは。ま、ないと思いますけどね」

「アスナがそつぱつとくれるなり、やつなのかも知れないな」

自分のことは言じられないが誰かにさう言つてくれるだけで気持ち
が楽になる。

「あ、笑つた」

「え？」

「先生今少し笑つてましたよ」

「そう、か？といつかそんなに驚くほどのことか？」

「ええ！それはもう……今まで完全に無表情でしたもん……あつて
も困った顔くらいで……」

「え？ そんなつもりはなかつたんだが……」

「 ルルなんですか？ ジヤ あ先生……ちよっと笑つてみてくださいよ
……」

「 … ジウ、 か」

言われたとおり笑つてみる。

「 つぶ……りょ、 先生怖い怖い……あはははあははははははは……」

「 お、 おこ。 そんなにひどいか？」

「 あはははっ……すみません……でもっ……今の顔つ……あはははは……涙
出しきた」

僕は一 体どんな顔をしていたんだらうか、 盛大に笑うアスナを見て
いるけどだんだん僕の口元も緩んでくる

「 うへ、 ははっ、 わい、 笑いすぎだ」

「あー先生ーー今ひやんと笑えますよーーっ！」

「そりか？ならアスナのおかげだな

「なんですかそれ！」

そんな会話が余計におかしくてしばらく僕らは笑い合っていた。

「あーおもしろかった」

ライ先生がすごい顔するからとアスナは言つ

「そんなにすごい顔してた？」

「ええ、そりゃあもうー。」

「そ、そつか、なんだか恥ずかしいな。でもなんだか初めてあんなに笑つた気がする」

「え？ つてことは私が人類初のライ先生の大爆笑姿の目撃者つてことですね！」

「あはははなんだそれは」

「うん、でも今思い出しましたけど。ライ先生、笑つたらヤバイです。やつぱりあまり笑わないほうが…」

特に微笑は…いや私には高畠先生がいるからいいんだけど…ヒアナが何やら呟いている

「おいおい、なんだそれは。もうヤバイ顔なのはわかつたから、さつきのことはもうからかわないでくれるとありがたい…恥ずかしいから…」

「いや、そつちも確かにヤバかつたんですけど、今のヤバイはそういうことじやなくて…」

「ん？」

「……え、いいです、いや、よくない…かも? っていつか小首をかしげないでくださいなんかヤバイですか。ってああもう何が言いたいの私! ?」

「いや、いちが聞きたい」

「あ、あー！あー！そう言えば記憶喪失の件…わかっている」と
はどれくらいなんですか？」

「またずいぶんと突然だな。構わないが。… そうだな。正直覚えていたのは名前だけだ。」

「でも、ヒカルちゃんから得た情報とかもあるんでしょ?」

「そう、だな… エヴァの話を聞いても自分の正確な歳もわからなかつたよ」

「……あれ? でも16歳つて… それにほりこに就職するときには履歴書? だつけ? 出したんじやないんですか?」

「……ここだけの話、本当に、僕がここにいられるのは学園長の厚意のおかげなんだ。学園内をさまよつていたところを保護されて、あとはもう、勢いに飲まれてしまつた感じでこうしてここにいる。だから年齢もわからないし、もしかしたら僕は君よりずっと年上のおっさんかもしれないな」

エヴァの話が本当ならば少なくとも400歳差だとは流石に言えない。

「あはは、そんなまさか… でも、そんなこと私に言つちやつてよかつたんですか?」

「どうだろう。自分が危ない人間かもしけないことを知つてくれる人は多少なりともいてくれたほうがいいと思ってる。それにさつき、ただの慰めだつたとしても僕の事を良い人だつて言つてくれたの嬉しかつたから… 後々信頼を裏切るのは嫌だつたんだ。まあ、このことは、他言無用で頼む。もうこれ以上誰かに言つ必要はないと思つてる。」

アスナの存在だけで、ずいぶんと気持ちが助かっている自分がいる。

と、突然ピリリと何かが鳴った。

アスナは何かをポケットから取り出した。あれは…ケータイか。初めて見たきがするがやっぱり知っている。

アスナはケータイを開き何かを確認したかと思うと先ほど言っていた目的地に向かおうと申し出た。

そして僕らは目的地、世界樹に向かった。

パンパンーん！

と世界樹に到着すると共に何かの破裂音が響いた。

「な、なんだ？」

『ライせんせーーー麻帆良学園によひーーー』

そこには1・Aのクラス全員と高畠先生がいた。

「ア、アスナ？」

「えへへ、驚きました？クラスのみんなでライ先生の歓迎会やるつ
つてことになつて私先生をここに連れてくるように頼まれてたんで
す。先生が世界樹行きたいつて言つたときはどうしようかと思いま
したよ…でもその後メールが来るまで忘れちゃつてたんですけどね」

あははとアスナが苦笑いをしてい

「やつだつたのか…すゞく驚いた。みんな、ありがとう歓迎してくれ
て嬉しいよ」

僕は照れくさこやう嬉しげにやうで思わずはにかんでしまつた。

瞬間、なぜか一瞬時間が止まったような気がした。

そして

『ヤバ

い！』

本日、一度田のお祭り騒ぎが始まった。

（ア、アスナ？僕はまたあの失敗を繰り返してしまったのか？）
（い、いえ、成功したから失敗したと言うかなんというか…（ナニ
コレ美人でイケメンで優しくて天然で美形で可愛いって……いやで
も私には高「Y」））

(ああ、やつだ聞きたかったがおっただけで、しゃたるん、ねじ
じみてなんだ?)
(...え?)

銀王と麻帆良～10月2日～（後書き）

思ひ立つたが吉田。ところがとで書をもした。書く紙のあらとをこ
書いとかないと…
つていきあたりばつたりなのがモロバレですね…

ところが20000円、ニーク3200だなんて本当にもつあ
りがとうございます。

あーびっくりした。こんなに読んでくださっている方がいらっしゃ
るなんて素直に嬉しいです。

こので書つのもあれですが、まほらわアソブの方もたくさん読んで
くださった方がいて嬉しいです。

それに見合つだけの内容の話がかけていたらいいんですけどね…汗

感想。評価等ありましたらぜひよろしくお願ひします。

世界樹の前で僕の歓迎会が行われていた。クラス全員が集まつており、凄く嬉しい。

先ほどの騒ぎも收まり、今はそれぞれまつたつと時間を過ごしてい

「やあ、ライ先生、アスナ君こんばんは。」

「あー高畑先生……」こんばんは……」

ジユースを片手にアスナと談笑していると高畑先生から声をかけられた。

「こんばんは、高畑先生」

「ライ先生、今日はお疲れ様だったね。初めての授業とは思えないくらい良い授業だったと思つよ」

「いえ、そんなことはないです。もうこいつぱことつぱんでした…」

「ははは、謙遜しなくてもいいじゃないか。ほんとよくほんとめてた
よ」

みんな、なかなかに個性的な人が多いからね、あのクラスはと小さ
くわざやいた。

「ああ、確かに、テンションと書つか、ノリはさすがと「うくら一
に高かつたですね…でもみんな仲が良くて、今だつてこうして僕の
ために歓迎会をしてくれるなんて、本当に良いクラスだと思います」

「はは、そうだね。アスナ君をはじめ、みんないい子たちだよ。」

「やだー!高畑先生ってばー!」

「そうですね。アスナもとてもいい子だと思います。今日なんかも
お世話をになりっぱなしで…」

「うふうふとライ先生までーっ!」

「なんだい、驚いたなもうそんなんに仲良くなつたのかい？」

「はい、生徒と言うよりも友人と言うか…相談にも乗つてくれて、とても親身になつてくれています」

僕よりも先生に向いてるんじゃないですかね、僕は笑つた。

「もううー！ライ先生ーー何言つてるんですかーー！」

「でも確かに今朝と比べて、ライ先生明るくなつたというか、一気に表情が豊かになつたね」

「それもアスナのお陰ですよ。でもさつきは失敗しちゃいましたけど…」

さつきの失敗を思い出し、憂鬱な気持ちになつた。

「失敗？何をだい？」

「え？高畠先生もさつき…見たんでしょう？」

「ん？ わつわ？ なんのこと」「あはははは、高畠先生… 気にしないでください。なんでもありませんから」「おおおいアスナ君？」

と、アスナは高畠先生の背中を押し向かへ追いやった。

「アスナへどうしたんだ？」

「いえいえ、なんでもないです。もひ、ライ先生気にしすぎですか
ら… もひの話題は禁止ですよ…。」

「？ そつかな」

「せうなんですか…。ひたすらのかー？ なんで一いや一いやひつむ見てんの
ー。」

気がつけば近衛木乃香がひたすらの様子を伺っていた。

「ややなあアスナ。一いや一やはなんて… 微笑ましいな思ひつて見て
ただけやんかー。」

「微笑ましつて何がよー？」

「んー？アスナ氣づいたらんのかー？やつぱり微笑ましこなあ」

うふふと木乃香が意味ありげに笑つ。

「こんばんはーライ先生、」いやつて話すんは初めてやんなー？「うち近衛木乃香つていいますー」

「」いえばんは近衛さん。」これからよろしく頼む

「うむなー、アスナのルームメイトなんよー。何か聞きたい」とあつたら何でも言つてなー？」

「ん？ああ、それはあつがたいな？」

「ちよ、」いのか！？あんた何言つてんのよーー。」

「アスナへビうかしたのか？」

何を急に慌てだしてこむのだろう。

「なんでもないです……」

「つふふーほんま微笑ましいなあ。ところでなあライ先生、ひとつ
聞きたことあるんやけどせつちゃん…桜咲さんとは知り合いなん
?」

「桜咲? ああ、刹那か彼女にはここに来たばかりの時、学園長の頼
みで生活に必要な学園の案内と、生活に必要なものの買い出しを手
伝つてもらつっていたんだ。それがどうかしたか?」

「え? ああ、そやつたんかあ。いやあなんでもないえー」

と顔に暗い影を落としている。何かあったのだろうか?

アスナも桜咲さんとのかつてなんか接点あつたつけて?と首をひ
ねつている。

「どうか。何かあつたらなんでも言つてくれ。僕に出来る事なら力
になる。まあ僕もまだここに来たばかりで頼りがいはないかもしれ
ないが……」

「へへへーおおきにー頼りにしますえー。なんや先生うひりとあ

んまり歳変わらんはずやのに大人っぽくてかっこええなあ。なんて
ゆーか、貴禄？みたいなもんがあるわー。（これならおじさまにし
か興味なかつたアスナが惹かれるんもわかるわあ）

最後、木乃香が何やら呟いた。

「…………のかー？なに変な」と言つてゐるよー。」

アスナにははつきつと聞こえていたらし。

「あーアスナ、すまんなあつい本音が…」

「本音？さつきの聞こえなかつたんだが、なんて言つたんだ？」

「それはなあ、アス「あー！あーー」のか……見てみて……あつち
！あの空…今…Tのみたいの見えた！行こーーー」

「え？ほんまに？行くいくー。ほなライ先生とりあえず失礼しますー」

「またね、ライ先生ーーー」

「ああ、また」

嵐のよつと去つていつた。何だつたんだらつ。

一人になつてしまつた。そこで僕はずつと気になつていた世界樹と呼ばれる大木に近づいてみることにした。

世界樹に近づきその大きな幹にそつと触れよつとした。すると

「ライ先生？」

世界樹の影にいたらしい桜咲刹那に声をかけられた。

「刹那、こんな所にいたのか。皆の中にいなかつたから少し氣になつていたんだ。」

「あ、その、騒がしいのは少し苦手で…」

「そつだつたのか、僕のために付きあわせてすまなかつた

「いえ！すみません！それは全然いいんです！私も、ライ先生のこと歓迎してますし。その、ちょっと人の輪に入るのが苦手と言つだけで…」

「やうだつたのか…ありがと」

「いえ、そんな」

「それにしても、こんな歓迎会を開いても『うれし』とは思わなかつたよ。嬉しい反面申し訳なさもあるな」

「どうしてですか？」

「うん？ 何て言うか、自分はここにいて良いんだろうかって。まあ今日で大分気持ちも落ち着いてきたし、やつぱり素直に嬉しいかな」

そう言い自分の頬が緩んだのがわかつた。

「ふふ、よかつたですね。ライ先生、まだ一日しか経っていないのに昨日とは別人みたいですね」

「そりかな？ 緊張が溶けたんだろうな」

ははつと僕は笑つた。

「ライ……」

何事かと思い振り返ると、エヴァンジエリンがいた。

「ああ、エヴァンジエリン。どうした？」

「…せつかくの歓迎会だ。一杯やらいかと思つてな」

そう言ひエヴァンジエリンの右手にはジュースの入つたグラスが握られていた。

「ああ、もちろん。嬉しいよ。そつだ、刹那も一緒に」

「なんだ、いたのか桜咲刹那」

「…はい、ずっとといましたよ」

「…いくらなんでも隣にいるのに気付かないのはおかしいだろ…」

「まあいい、せつかくのライの歓迎会だ。ここは大人しく乾杯する
としようか」

「は、はい…そうですね」

エヴァンジエリンの高圧的な態度に刹那が圧されぎみだ。

「では、乾杯」

「「乾杯」」

そしてジコースを飲み干した。

「あの……エヴァンジエリンさんとライ先生は知り合いなんですか？」

刹那がおわるおわる尋ねた。

「ああ、わいわい。申し訳無い」と僕は覚えていないんだが……

「え……本当にエヴァンジエリンさんの知り合い……なんですか？」

「なんだ？私がこいつの知り合いで、何か貴様に不都合なことでもあるのか？」

「……え、ありませんが……」

「ふん、余計な詮索はするな。」この身元は私が保証する。ついでに貴様の護衛対象に危害をくわえるようなこともない。それから、このことは、他言無用だ。特にじじいには」

「……学園長はこのことを知らないんですか？」

「詮つ必要もないし、言いたくもない。私にだつて知られたくないものも、守りたいものだつてある。貴様と同じようこ、だ。わかるだろつ？」

「……わかり、ました。ですが一つ確認が……すみませんライ先生、少し失礼します」

そう言い一人は僕には聞こえぬよう、少し離れたところで会話を始めた。

さつきの会話、本人を前にしてえらく重たい話をしていた。護衛がどうの、秘密がどうの、と。

まず、護衛対象と言つていたが刹那は誰かを護衛しているのだろうか？それで常に得物を？
なにか隠し事もあるようだ。

そして、僕とエヴァンジエリンが知り合いであつたと言つことを学園長に隠す必要があるらしい。

これは何故だろ？

彼女が吸血鬼だということに関係があるのか、はたまた、僕自身に問題があるのか、なんにせよ僕の勘でしかないが、学園長に伝えるとなるとなぜか嫌な予感がする。なにかよくない感じがするのだ。

これからは誰かに聞かれても、僕とエヴァンジエリンの関係は黙つておくことにしよう。

様々な可能性を考えているうちに一人が戻ってきた。
詮索は、しないでおくべきか。

「待たせたな」

「おかえり。早かつたね」

「まあな。少し確認されただけだから」

「へえ、確認、ね」

「気になるか？」

「自分が関わっていそうだし『氣』になると『氣』になるほど、わざわざ離れてするような話だ。僕に聞かれては困るんだりつー。」

「ふむ、私は困らんが、どうらかと『氣』と困るのはお前だろつな」

「僕がか？それは、聞きたくよつたくなつてよつたな、なんとも氣味の悪い感じだな」

「ふふ、どうしても聞きたければ教えてやるわ。」

「やつだな、今の状況がもつと落ち着いて、聞く氣になつたら聞く

少なくとも、今困り事が増えるのは困る。

学校になれたり、記憶を探したり、ただでさえやることがたくさんあるのだ。

「ふむ、まあそのとき教えるかは私の氣分次第だ」

「はは、なんだそれは。ああ、あと刹那

「え？ あ、はい」

「さつきの話を聞いた限りじゃ、君もなにかと大変なこと、してるんだろう。何かあつたら何時でも言ってくれ。一人じゃどうにもならないこともあるって、僕は初日でいきなり学んだところだからな」

と、僕は思わず苦笑した。

明日菜が励ましてくれていなければ、僕は今でも悶々としているだろう。

誰かに言われて初めて気が付くこともあるのだ。

「でも、先生は…」

「ふむ、やつぱり僕に知られては困ることか…だったら、エヴァは知ってるんだろう? なら、エヴァにでも相談してみたり、頼つてみたりしてみたらどうだ?」

「え、エヴァンジェリンさんにですか…? いや、それは…」

「なつ! 馬鹿か! 嫌に決まっているだろう!」

二人は突然の提案に驚き、エヴァンジェリンに至っては大ブーイングだ。

「なにか問題もあるのか?」

「問題だ…ちよつとお前には言えない感じに問題なんだ！それに、そんな義理はない！」

「わ、私も…問題ないと言えば無いような気もしますが、なんと言うか、その発想はなかったといいますか…どうなんでしょう？」

「刹那、さつき護衛をしているとこりよつなことを言つていたな。君が誰を守つて、何を隠しているのかは僕には全然わからない。でも、誰かを守りたいなら、誰にも頼らないでつていう考えは危ない、一人で抱え込んでいたら守りたいもの、守りきれなくなるかもしない、と僕は思う。」

何故だかわからないがそんな気がする。何故だらつ。記憶も無いのに胸が締め付けられる思いがした。

僕は昔、何かを経験したんだろうか？

「先生…？」

「ライ…」

そんな僕を刹那とエヴァンジェリンが心配そうに見ていた。二人の視線に含まれている心配の意味は、恐らく違うのだろうと思つた。

何故だかしんみりしてしまつた空氣を振り払つたため、僕は努めて明るく言つ。

「というわけで、だ。エヴァ、刹那が何か相談してきたら、絶対のつてやるんだぞ。刹那も、言いたくなつたら僕でもエヴァでも、好きな方に相談してくれ」

「つだが、しかし……」

「エヴァ……」

僕はエヴァンジエリンをじっと見つめた。

しばらくこらみ合いならぬ見つめ合いが続き、やがてエヴァンジエリンは根負けしたのかため息をついた。

「はあ、わかつたよ。まあ、こいつが私に相談などしてくるとも思えんし、取りあえずは引き受けたるさ」

「うん、いい子だ。聞き分けのいい子は好きだな

エヴァンジエリンの頭を強めにわしゃわしゃと撫でた。

「な、ちよ、すつーつてやめんか！—子供扱いするな！—」

そつとわれああ、そつとれば600歳だつたか、子供でもなかつたな子供扱いはあれか、と撫でるのをやめ、頭から手を離す。

「あ…」

するとエヴァンジエリンがなんとも言えない表情をした。
名残惜しそうな、捨てられた子猫のよつな。
なんとなくもう一度頭に手を載せてみた。
明らかに表情が変わった。

おもしろい。

とうあえず、子供扱いするのをやめようと思ったのは撤回しようつと
心に決めた。

するとくすくすと刹那が笑いだした。

「あ、ごめんなさい、つい、笑つてしましました。ちょっと今まで
エヴァンジエリンさんのこと、誤解していたみたいですね」
くすくすと今も笑つている。

「桜咲刹那！なんだそれは！馬鹿にしてるのか！？」

刹那に掴みかかるうとするエヴァンジエリンの頭をがつしりとホー
ルドし、それを阻止する。

「なあつー？離せーライー！」

「いいから落ち着け」

それすらもツボに入ったようで、刹那は笑い続ける。

「笑うなあああ！」

刹那の笑いが治まるのに数分を要した。

「あ、あのありがとうござります。なんだが、お一人を見ていたら元気が出てきたというか、自分の在り方をもう少し楽に考えられるような気がしてきました。

今は無理ですが、決心できたらライ先生にも話せる時がくればいいなって思います。エヴァンジェリンさんもよろしくお願ひしますね。

「

「くううう！なんだ！？取つて付けたよつてーもう知らんー知らんからな貴様なんぞどうなろうと」

「エヴァ」

僕は一言たしなめた。するとエヴァは大人しくなってくれた。

なんだかよくわからないが、刹那に、僕の言わんとする」ことが上手く伝わったようでおかつたと思う。どこのか論点がずれてしまつた感があるので、もともと主語のなかつた話だ。別のことでも刹那が抱えていた何かを軽くできたよつなのでよしとしよう。

二人をつれて皆が集まつてゐる広場に戻つた。

すると今度はいつのクラスの朝倉和美に声をかけられた。

「ラーアせんせー！私、報道部の朝倉和美だけど、先生について新聞書きたいからインタビュー、受けてくれません！？」

「インタビュー……？僕なんかのことでいいなら別に構わないが…別に面白いことは無いと思つぞ？」

「いーのいーの…そんなこと心配しないで…じゃあまずはプロフィールから、お名前は！？」

「ライ・シルヴァニアだ。そんなところから聞くのか？」

「とーぜん…じゃあ次年齢と身長、体重！」

「16歳、身長は…正確にはわからないが179くらいか？体重は測つてないからわからない」

「おお！先生背えたかー！じゃあ本題、前にも聞いたけど好きなタイプ！名指しじゃなくて性格とか！」

和美がそれを聞いた瞬間何故か周囲に緊張が走った気がした。

「好きなタイプ、か。難しいな。そうだな、何かに一生懸命な人は好きだな。特に自分の身を省みない人なんかはつい力になりたくないかもしれない。信念がある人って、素敵だと思うな」

「……あ、はつ！…なるほどなるほど。じゃあ次行きますーー一日目にしてうちのクラスの神楽坂明日菜さんは随分仲がよろしくなつてこるようですが、これについては？」

「はつーーばー朝倉ー何言つてんのよーーそういうのやめてよねーー」

話を聞いていたらしいアスナが身を乗り出す。

「まあまあ明日菜、慌てない、慌てない」

「慌ててなんかないわよーー」

「照れない、照れない」

「照れてもないから！」

「満更でもない、満更でもない」

「あーもう、ほんとみんなすぐそういう話題に持っていくんだから…
もつライ先生も正直にそんなわけないって言ってくださいよ」

「正直に？」

「ええ、もう、ガツンと！」

「そうだな、満更でもない」

しん、と辺りが静まり返る。
すこく既視感がある。そして

『キヤー！』

一瞬の沈黙の後、クラス中が急に騒ぎだした。
アスナが正直に言えと囁つから言つたのだが、何か間違えただろうか？

「「ラララララライ先生！？」何をおしゃられてありますでしょうか！？」

「どうした！？日本語がおかしくなつているぞアスナ！？」

そして倒れたアスナに慌てて駆け寄る。すゞく熱い。

「あかん、アスナがオーバーヒートしとる…それにしても先生、なかなか言つよるなあ」

「何かおかしこと、言つたかな？正直に言つただけなんだが…」

「おかしこと、言つたんだな…ま、ええわ。ライ先生はその方がええ」

意味がわからない。

そしてわざわざからエヴァンジエリンがどういうことかと僕をガクガクと揺さぶつてくるのだがどうにかならないのだろうか。みんな一体どうしてしまったというんだね？…

この騒ぎが収まるにはまた数時間かかり、そして会はお開きとなつた。

(私といつものがありながらああああああ！－)
(だから私には高畠先生が…ああああダメもう意味分かんない)

銀王と麻帆良10月2日? (後書き)

だんだんキャラが崩壊してきたような。
おかしいな、シリアルなギアス編のような雰囲気にしたいと嘗て当
初の目的は、私の萌えの為にログアウトしたのです。

今回、ロスカラ本編で好きなセリフ、使わせていただきました。記
憶を頼つたので一字一句同じということはないでしょうが…。ライ
カレの会話ヤバイです。萌えが。多分またやつてしまふと思ひます…
ああいうことをさらつと言う辺りがライの真骨頂だと思つております。
す。天然なのか無自覚なのか…はたまた…

感想、評価等ありましたら是非よろしくお願いします。嬉しいです。

「明日菜ーもうお腹もでーそろそろ起きなー」

「ん、ん…もうちょっと寝かせてよ~木乃香~」

ライ先生の歓迎会を行なつてから4日ほど経ち、今日は土曜日。普段バイト早起きしている身としてはこうとき寝溜めしておきたいといつ願望がわいてくるもので、今も現在進行形で布団の中。

それに最近、ライ先生が来てからとまつものどつとも眠れない夜を過ごしている気がする。

ライ先生と言つのは10月の始めと言つても微妙な時期に副担任としてやつて来た不思議な先生。

不思議なところと云つのは、まず先生と言つてもまだ16歳で、私と3つしか変わらなことこの。

16歳で教師になれるのか疑問だけど、ブリタニアの大学を卒業しているらしいからそういうものなのかもしれない。いやでもこれも表向きの肩書きだったなとふと思い返す。

そして容姿。何と言つても田を惹く容姿なのだ。整った顔立ちにスラリとした長身、白い肌、そして一際田を惹く銀髪に蒼い瞳。そし

て若いのにスーツ姿もよく似合つていて、本人は自覚していないみたいだけど、とにかく…田立つて、ここ、麻帆良学園にはちょっと変わった人が多いけど、ライ先生も変という意味ではなくて、とにかくどこか人間離れした雰囲気をまとっている。

整いすぎた顔立ちと、冷たい蒼い瞳のせいか、冷たい印象はあるけど、話してみたら記憶喪失の自分のことよりも、周りの人のことを中心配しているような優しい人だった。

そう、彼は記憶喪失らしい。記憶喪失のせいなのかどうなのかはわからぬけど、最初はこれでもかと言つほど無表情だった。今ではもうそんなことはなく時折柔らかい微笑を浮かべるようになつていて。

最初無理矢理笑つてもらつたときは、ぎこちなくて、ひきつり笑いと言つた、まるで凶悪犯かというような顔をされたけど、それもいい思い出だ。

そして記憶喪失なのだ少し困つたように言つライ先生に、私はどうか親近感のようなものを感じていた。

私も昔のことは覚えていない。似たような境遇の人と出会つたのは初めてだったから、そういうものを感じたんだと思う。

それで、何故私が眠れない夜を過ごしているのか？
そんなの、ライ先生に聞きたいくらいである。

ライ先生と出会ったのは今週の月曜日を無視するならば、その翌日にある火曜日だ。

私が新聞配達のバイトへ向かう途中、一人で歩いているライ先生に声をかけたのがきっかけ。

話してみると、ライ先生は今の自分の状況に戸惑っていたみたいで、気がつけば私も記憶喪失だったことを明かし、力になると言つてしまっていた。

そしてその日の放課後から、私の中の何かが悶々とし始めた。

そう、あの人は絶対天然だと思う。彼の言うこととやることに一々惑わされてはいけない。

わかっている。わかっているのだけど。

君と話す機会を増やしたかつただとか言つたり、ふとした拍子の微笑みだとか、カッコいいと見せかけて可愛かつたり、その逆もしかり、仕事はしつかりしているのに、日常生活では、どこか抜けていてギャップ萌えと言うやつだろうか…とにかくいちいちドキリとしてしまうことをする人なのだ。極めつけは歓迎会での一件。

私と仲良くなつて満更でもないとか言い出したのよあの人は！
ここまで来ると勘違いしないレベルを越えているんじゃないかと私は思う！

つていうか勘違いしない人がいるのかと私は問いたい！

いやいやいやいや落ち着け明日菜。素数を数えるのよ……ん？素数つて何よ？

……素数つて何なのかについて考えていたら落ち着いてきたわ。結果
オーライね。

そもそも、私には高畠先生のような素敵なおじさまが好みなのであって、ライ先生みたいな若い優男風な人は範疇外だ。

だから別にライ先生のことなんて……ことなんて……いやでもライ先生ってなんか放つておけないし、放つておいたらダメな気がする。

そう、それに私のような勘違いしそうになる人を増やさないためにも、私がライ先生の記憶探しのお手伝いをして……

べ、別に他の誰かと親しげに歩いているライ先生を想像して、なんかヤだなとか思つた訳じゃないんだから！

あくまでもそう、勘違いしてしまふ人を増やさないようになつて言う……あれ？でも待つてよ？なんで勘違いする人が増えたらダメなんだっけ？あれ？あれ？あれ？

と毎回ここで思考停止して悶々とした夜を迎えるのだ。

「明日菜ー？ いいかげん起もやー」

再び木乃香の声がして私はのそりと起き上がつた。

「もー… 明日菜つてばー 明日菜のライ先生とのトークが楽しみやから
つて寝付けんのはわかるけど、こくらなこども寝過やでー」

時計を見れば時計の短針は1時をむいていた。

「な、何言つてんのよー。トークなんかじやないわよー。ただ道案内す
るだけで…！」

そう、明日、日曜日、私はライ先生に道案内することになつていた。
学園内はあらかた見て回つたので今度は学園外だ。

「ふふふ、もひ、明日菜ー照れんでもええやんかー」

「だから照れてなんかないつてばー…」

「はいはい、まことやうでもなこまことやうでもなー」

「もー… それ引っ張り過ぎだつてばー… 今週クラスですかとやつ

やつてこじりてんだからね……全く……ライ先生が変な」と叫つか
「」

「でも明日菜やつてもそれなりでもない言われてまごりでもなれや
つやこ」

「やつそんない」と……」

「ほんまに嫌なら道案内なんかせんせやしなー」

「い、いやだからやれはつ」

「ほこはいわかったわかった、ほなそつこいつ事にしどつたるわ。そ
れより明日菜顔洗つてしま、お嘔」はんでもうね」

「もー……なによその顔は……」飯あつがと木乃香」

そして私は顔を洗つて身支度を整え、このかが作つてくれた昼食を
食べた。

なく朝早く目が覚めた。

こんな事だからまた木乃香にやつぱ楽しみやつたんやなーとかからかわれてしまふんだろうなと私は一人ため息を付いた。

待ち合わせは8時に学園の門。今の時間はまだ6時。私はゆっくりと支度を始めることにした。

「ほな、明日菜、頑張つても…」

「頑張るつて何をよ…」

「そんなんアピールやアピール！！ライ先生この一週間でクラスにも馴染んできて、競争率高くなつてきとるみたいやで」

「競争率ー？何よそれ…だから私は関係ないつてば…」

「そんなん言つとる場合ちやうで明日菜。ライ先生、学園内を結構歩きまわつとるうちに、結構な数の女子生徒のハートを射止めとるつてもつぱらの噂やで…！」

「へ、へぇーそななんだー。射止めるつて例えばどんな感じなの？」

「やつぱ気になるんか明日菜。ふふ、かわええなあ。何でもな、困つとる生徒がおつたらそれはもう親切に対応したり、ナンパで困っている生徒を助けたり、例えるなら王子様のように颯爽と現れて、爽やかに去つていく感じみたいなあ。密かにファンクラブができるじるゆー噂もあるわ」

赤べつフラグ建築士だとか、白銀の君だとか色々通名がついてゐる
らじいでと木乃香が呟つ。

「へ、へえ……たつた一週間の間でそんなことになつてゐるんだ…」

「せやから明日菜ー頑張りんと…」

「へ、だから私はひつでもここひばーーかへ、出かせるから….
行つておます…」

「おじさまもええけど、ひもライ先生素敵やと想ひでー。どこか
く頑張りやー。行つてらっしゃー」

だから、何を頑張れつていつのよー…そんな感じになつてば…！

そんなことを考えてくるついでに学園の門の前に着いていた。時刻は
7時50分。待ち合わせー0分前だ。

「おはよー、明日菜。すまないな」こんな朝早くから付きあわせて

「ハイ先生ー。おはよーハイヤーコサカー。」

先に着いていたらしいハイ先生が門の影からひとこと出てきて声をかけられた。

私は昨日や、朝に木乃香に言われたことを思ひ出して思わず顔が熱くなってしまった。

「どうした? 顔が赤いみたいだけど… もしかして体調悪い?」

心配そうに顔をかけてくるハイ先生に私はますます顔が熱くなつてくのを感じた。

「ひやつー?」

ふいにハイ先生が私の額に手を当てられた。熱くなつた体に冷たい手が心地よい。しかしますます熱くなつてくる。

「うーうー」ことを自然とやつちやつんだもんなー本当に心臓に悪い。

「やつぱり、熱いな。風邪かもしれない。帰ろつか?」

「い、いえー違いますーーこれ平熱なんですよーー私昔から体温高く

て!!」

あなたのせいですよ！…などとこえる筈もなく、あははーと何とか「まかそつと必死に笑う。

「やつ、 なのか?」も体調悪くない?」

「ええ、 もう、 バッヂリですよ！…昨日もよく眠りましたし！健康そのものです！」

「ならよかつた」

ヒライ先生が安心したように微笑んだ。

何をするにしてもいちいち優雅な感じがするのはなんでだろ?か…もしかするとブリタニアの貴族だつたりとかするのだらうか。

それより、 今問題なのは、 」の間まつと額に手を当てられていると「この現状。

そろそろ限界だ。 恥ずかしきがる。

「あの… ライ先生? その… 手を離さん…」

「あ。 ああ、 すまない」

忘れていたといつよつヒライ先生は私の額から手を離した。

「い、 いえ、 心配してくれてありがとつぱやこまゆ」

「固こな…」

「えー…おでこじが…ですかー…？」

いきなり何を言い出すのだろうかこの人は…。そもそもおでこじは固いとか柔らかいとかあるのだろうか。

いやでも、言われるなら固こより柔らかじほうが良かつたかもと、よくわからないながらに落ち込んでしまう。

「いや違つ違つ。おでこじやないよ。話し方。ずっと思つてたんだけど明日菜、どちらかと言つと敬語とか苦手だらう。無理に敬語で話さなくともいい。普通に、同級生と話すように話してくれてかまわない」

なんだ、話し方だったのか。おでこじやなくてよかつたと謎の安堵感が生まれた。でも、

「いいんですか？ やつぱり年上だし、先生だし…」

「先生といつても、肩書きだけだし…。ああ、もちろん仕事はちゃんとするが。敬語使つてないなとか気にしないよ。最初からタメ口の生徒なんて何人もいるし。それに…もしかしたら僕のほうが年下かもしれないぞ？」

「さすがに年下には見えませんつで…。」

「あはは、まあ、さすがに年下はありえないけど、普通に話していく

「わ、わかりました！敬語やめます！だからその顔やめてください！」

「それ、敬語なんだけど… つていうかその顔つて？」

「あ、えと、わかつた！わかつたから」

「あ、なんか新鮮だな。敬語じやない明日菜」

さつきの寂しそうな顔から一転してうれしそうに笑う。初日の無表情は一体どこへ行ったのか。まるで子供かといふように「口口口」と表情が変わる。

セリニティのヒントとしてお伝えすれば、母性本能とでも言つ

のたけか?

え？あれ？私キニンとしちゃ二てたの！？なんで！？あれ！？わか
んない！！

あまり考へても悶々としてしまつのでせう私の感覚は心の奥底にしまつことにする。

「あ、あと、別に先生もいらない。正直、先生つていつ柄じゃないし」

「いや、さすがにそれは…それにライ先生すぐ立派に教師やつてると思つんすけど…」

「そうか？それは嬉しいが…大丈夫だよ。エヴァなんかも普通にライつて呼んでくるし…あと明日菜、敬語、戻つてる」

「あ、『』めん。だつて、エヴァちゃんは昔の知り合いだつたからじや…」

「それもあるとは思うが、昔のことは僕もまだ思い出せていないし、それに、大切なのはこれからだつて言つたのは明日菜だろう」

ふ、とライ先生が不敵に笑つた。あ、こんな顔もするんだと場違いなことを思つて私はライ先生に答える。

「わ、わかったわ。ライ…先生」

ちょっと待つて、なんか無理いきなりは無理…！照れくさいつてい

うか恥ずかしこりてこりがなんか無理……

「……明日菜？」

「う……」

「うえ。向だ明日菜？」

「……向こやつとこ……？」こんなのがね……

「うへライが呼ばせたんでしょ……向だつて……なによ……」

「はは、やうだつたな。すまない」

「やうへライの馬鹿……やうへ行くわよ……」

「解。今日は宜しくお願こします、明日菜隊長」

「ふふふ、ライ隊員、泥船に乗つたつもりで着いて来なさい……」

そして私たちは電車に乗り東京方面へ向かつた。

(明日菜、泥船は沈むんだよ?)
(あれ? そつだつたつけ?)

とうあえず投稿。

次の話投稿するにあたって問題点…

東京埼玉行つたことないので何もワカラナイヨといつ
原宿？渋谷？新宿？秋葉？距離感とかお店とか一切ワカラナイヨー。
いやいや、ここからここへは行かねえだろ！！とか矛盾があつても
これはファンタジーの東京なんだと思って見逃してください。10
0%妄想の東京です。

きっと詳しくは書きませんけど…

ご感想等有りましたらぜひお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5740t/>

銀王と…

2011年11月20日15時08分発行